酩酊船私解

小田良弼

目次

I　酩酊船以前
II　酩酊船以後
III　酩酊船註解

ランボオの飜譯については「ランボオ全集」第一卷、第二卷（人文書院）および小林秀雄譯「ランボオ詩集」（小林秀雄全集）を使用させて頂いた。なおそれぞれの製作年代、配列の考證研究については、すべて右全集に從つた。記して深甚なる謝意を表する次第である。

I　酩酊船以前

この晦澁難解の詩、酩酊船を解釋しようとするに當つて、この酩酊船を中にして、それ以前とそれ以後の二期にわかち、ランボオの詩的世界展開の跡をたどり、且つ他と類を異にするかに思われる放浪生活の意味をもあわせ考えつつ、ランボオの全詩的世界、否全生活からこの酩酊船に對する解釋を試みてみたいと思う。ランボオの詩を酩酊船以前と以後に分つことについては、嚴密にいえば正しくないかもしれない。クローデルはこれを三期にわけているが、それも一つの分け方であるかもしれない（Cf. Œuvres de Arthur Rimbaud, par Paterne Berrichon, Mercure de France, 1924）。その他のわけ方も可能であろう。然しここでは酩酊船そのものの解釋に主力をそそぎ、他はなるべく簡略にしたいと思うので、その時期の分け方も簡單に、酩酊船以前と以後とに分けた。

*　*　*

酩酊船以前の時期は、ある重要なる點を除いて、酩酊船以後の時期をすでに萠芽的にはらんでいる時期であり、酩酊船およびそれ以後の諸作品は大體においてこの期の必然的な展開と見てもよいと思う。また「夕の祈禱」Oraison du Soir や「盗まれた心臟」Le Cœur volé のような、かなり顯著に酩酊船の先驅をなす作品が見られる。よく引用されるヴォアイアンの手紙（ランボオ全集、第一卷、書簡、八、九、參照）の中でランボオの述べていることは、確かにランボオを考える上に重要な言葉にちがいない。一見すると、この一八七一年の五月を境として、それ以前と比べて、注目すべき新しい一歩がふみ出されたとも考えられる。クローデルも前記の序文において、période du voyant として一時期を劃して

いる。しかし同じくクローデルが第一期として période de la violence du mâle tout pur, du génie aveugle……なる時期をたてている、その期と時期を劃するほどの本質的な、あるいは本質的とまでいわなくても、それほど重要な相違が見られるとは私は考えない。もともとこのヴォアイアンの手紙の文言の意味するところは、この手紙だけではそれほど明確ではなく、ランボオの全作品、ことに酩酊船および酩酊船以後の諸作品に照し合すことによつてはじめてその意味を明確にしてくるものと思うのであるが、後々に考定するような意味に解釋することが許されるとすれば、このヴォアイアンの手紙の中でランボオが述べたような世界は、それ以前の諸作品にすでにかなり明確な姿をとつてあらわれているように考えられるのである。即ち酩酊船以前の時期は酩酊船および「地獄の季節」や「飾畫」の中の一部の詩篇を除いたそれらとも、一貫して相通ずる詩的世界を展開していると考えられる。かく考えるとフランス文學の流れの中に突如として現われた孤島の樣なこの若年の天才の出現にただ驚嘆を禁じ得ないのである。

極く初期のものに屬する「太陽と肉體」Soleil et Chair（一八七〇・四・二九―ランボオ全集による。）の中で

Je regrette les temps de l'antique jeunesse,
Des satyres lascifs, des faunes animaux,
Dieux qui mordaient d'amour l'écorce des rameaux
Et dans les nénuphars baisaient la Nymphe blonde !
Je regrette les temps où la sève du monde,
L'eau du fleuve, le sang rose des arbres verts
Dans les veines de Pan mettaient un univers !
……………
Où, debout sur la plaine, il entendait autour
Répondre à son appel la Nature vivante ;
……………
Je regrette les temps de la grande Cybèle
Qu'on disait parcourir, gigantesquement belle,
Sur un grand char d'airain, les splendides cités ;
Son double sein versait dans les immensités
Le pur ruissellement de la vie infinie.
L'Homme suçait, heureux, sa mamelle bénie,
Comme un petit enfant, jouant sur ses genoux.
――Parce qu'il était fort, l'Homme était chaste et doux.

僕はなつかしく想ふ、かの太古の青春の時代
色好みの半獸神（サチール）や獸じみた牧神（フォーヌ）の時代を
この神々は戀しさ餘つて小枝の樹皮を齧つたり
睡蓮の中で金髮のニンフに接吻したりしてゐた！
僕はなつかしく想ふ、地球の生氣と大河の水と
綠の樹々のばら色の血が、牧羊神（パン）の血管の中に
別の宇宙を流しこんでゐた時代を！
……………
平野につつ立つて、牧羊神（パン）は、身近かに生々とした大自然が
自分の呼びかけに應へてくれるのを聽いてゐた。
……………
僕はなつかしく想ふ、かの偉大な地の神（シベール）の時代を。

仰がんばかりに美しいこの女神は、青銅の大戰車に乘り、
壯麗な邑々（マチマチ）を駈けめぐつてゐたとのことだ。
彼女の兩の乳房は萬里の地上に
不滅の生命の淸らかな流れを注いでゐた。
人間は幼兒（ヲサナゴ）のやうにその膝の上でじやれ遊びつつ、
嬉しさうに、めでたい乳房をしやぶつてゐたものだ。
——人間は强かつたので、純潔でもあり溫和でもあつた。

かく、ランボオは太古の靑春の時代、サチールやフォーヌの時代を、シベールの時代を想つてやまない。この想いは後述のように、最後まで續くのである。筆を絕つた後までも續くと見てよいのである。この太古の靑春の時代はサチールやフォーヌが樹皮を齧つたり金髮のニンフに接吻していた時代である。樹皮を齧るとは、後期、地獄の季節の中の「飢」の中で

Les salades, les fruits
N'attendent que la cueillette ;
Mais l'araignée de la haie
Ne mange que des violettes.

野菜のサラダや果物の
もがれる許りでゐるものを、
垣根の蜘蛛めの食ふものは
ただ、紫の菫草

とサラダや果物をよそに、ただ菫草を食つて何の不平不滿もない蜘蛛を想う心と通じるものがある。餘計なものを求める心、求めるための手段としての知が、人間をしてこの太古の靑春の時代から遠ざからしめたのである。かかる求める心、求める知のない太古の時代は獸じみた、いわば無求の時代であろう。金髮のニンフに接吻していた時代とは、やはり後期、飾畫の中の「H」で "Là, la moralité des êtres actuels se décorpore en sa passion ou en son action" 「其處に、現代の人間共の道德は、彼女の情熱か或は彼女の行動の裡に解體を行ふ。」といつているような超倫理、道德以前の世界を指すものであろう。太古の靑春の時代は道德以前の世界である。かかる道德以前の無求の太古の時代は「地球の生氣と大河の水と綠の樹々のばら色の血が、牧羊神（パン）の血管の中に別の宇宙を流しこんでゐた時代」である（傍點筆者）。知にけがされた現代世界とは別の宇宙をなしているのである。それこそ「生々とした大自然」であり、シベールの時代である。そこには「不滅の生命の淸らかな流れ」が流れ、人間は「幼兒」のようにその愛情にひたつていたのであり、「純潔溫和」であつたわけである。

ランボオの想つてやまなかつた太古の靑春時代はかかる淸淨無垢の、別の宇宙をなす大自然であつた。かかる自然への憧憬はその他、「惡」(Le Mal) ——Nature, ô toi ; qui fis ces hommes saintement ! 大自然は人間を折角淨らかに創つたのに——に、看護修道尼 (Les Sœurs de Charité) ——Il porte à la nature en fleur son front saignant 血の滲むその額（ヒタヒ）を花咲く自然へと差向けるのだ——などに見られる。あるいは「大沙漠」を想い、あるいは「母なる大地」la terre maternelle と呼んでいるのも同じところから出ているのである。あるいはまた彼がにくしみをなげた軍隊に屬する兵士ですらが、太陽のふりそそぐ靑葉の谷間では安

らかに眠るのである（Le Dormeur du Val）。大自然の中にこそ眞の安らぎがあるのである。

かかる意味で、ロマンチストとは違つた意味で、ロマンチストを超えた意味で大自然を想つてやまなかつたランボオが子供を愛し賤民を愛したのは故なしとしない。兇暴な哲學 philosophie féroce をもとうとし、兇暴な孤獨 atroce solitude を感じ、クローデルが野人的神秘家 mystique à l'état sauvage といつたランボオと子供とはおよそ不似合いに感ぜられるかもしれない。しかし知の世界、知に出發する世俗世界、二元對立の世界を知らず、「膝の上にじやれ遊び」つつ「乳房をしやぶつて」いる、何のはからいもない子供こそ大自然の一つの姿ともいえよう。

Noirs dans la neige et dans la brume,
Au grand soupirail qui s'allume,
Leurs culs en rond,

雪の中、霧の中に黒々と
風抜窓のほてりの前に
お尻を輪にして

（Les Effarés）

パンを燒くのを眺めている子供には、その額には血は滲んではいないが、大自然の一つの姿があるといえよう。彼等の心は

Ils ont leur âme si ravie
Sous leurs haillons,

襤褸着の下で彼等の心は
とろけんばかりうつとりする。

からである。この同じ想いがまた姿をかえては「何一つ不平を言はず、高貴な愛情で女房を可愛がり、その貴い微笑のもとでせつせと働き、單純で熱烈な生活を送りたいといふ夢を」時折いだく賤民に對する愛情となつてあらわれるのである（Forgeron）。その愛情は單なる憐憫から出發する様な淺い愛情ではない。兇暴な哲學をもとうとした、野人のランボオには憐憫の情などはひとかけらもない。

Pouah! mes salives desséchées,
Roux laideron,
Infectent encor les tranchées
De ton sein rond!

うわァ堪らん！ひからびた僕の唾液が、
焦茶の髮した醜い娘よ、
お前のまるい胸のくぼみに、いまなほ
臭氣を放つてゐるとは！

（Mes petites Amoureuses）

愛した「醜い娘」大自然をうたおうとした己の言葉は大自然の前には「ひからびた唾液」に過ぎず、清淨無垢の大自然を犯す「外道の言葉」paroles païennes に外ならぬとして自責の情を感ぜしめるような世界に對する愛情と見なければならない。

しかし人間は知性と社會性とを根源的な性格としてもつ。ここに二元對立の世界が生れる。人間の煩惱はすべてこの二元對立の世界に基くものと見てよい。この知的倫理的人間社會からは大自然は「永遠に遠く彼方へ逃げてしまふ。」ここに知性の否定、日常社會に對する嫌惡が生れる。前掲の「太陽と肉體」で引つづき

Misère! Maintenant il dit : Je sais les choses,
Et va, les yeux fermés et les oreilles closes.
—Et pourtant, plus de dieux! plus de dieux! l'Homme est Roi,
L'Homme est Dieu! Mais l'Amour, voilà la grande Foi!

なさけなや！人間は何でも知つてゐるとうそぶいて、
眼を閉ざし、耳をふさいで歩いてゐる。
しかるに神々はもうゐない！　神々はもうゐない！　いまや人間が王様だ。
人間が神様だ！　だが愛こそは依然として偉大な眞實だ！

知性の人間は何でも知つていると思つているが、對象的固定的概念的知識に過ぎず實は目を閉ざし耳をふさいで眞實からは遠ざかつた存在に過ぎない。そこには神々はなく、人間自らが王様となり神様とすらなる。かくて

Oh! si l'homme puisait encore à ta mamelle,
Grande mère des dieux et des hommes, Cybèle;
S'il n'avait pas laissé l'immortelle Astarté

おお！　神々と人間たちの大いなる母、地の女神(シベール)よ
人間どもが、今もなほ御身の乳房を吸つてゐたらよかつたのに、
天の女神(アスタルテ)を人間どもがいつまでも手放さなければよかつたのに！

かかるなげきが發せられる。地の女神(シベール)の乳房から離れ、天の女神(アスタルテ)を手放した人間は、如何に知性を誇り自己を最高の位置におしあげてみても、所詮は安らぎの得られようはずはなく、「慘めで醜」い。いやむしろこの知性による「蒼白い分別」こそ大自然の「無限を隱してしまふのだ」。かかる分別を超えた無分別の世界にこそ無限なる清淨無垢の安らかさがあるはずである。しかし知性を與えられた人間は「生れながらの美を辱しめてまで、生きようと望」むのである（Il veut vivre, insultant la première beauté!）。

かかる人間知性に對しては、

Ces vieillards ont toujours fait tresse avec leurs sièges,
Sentant les soleils vifs percaliser leur peau,
Ou, les yeux à la vitre où se fanent les neiges,
Tremblant du tremblement douloureux du crapaud.

老耄先生(オイボレ)、年が年中、その椅子に結(ゆは)ひつけられ、
太陽の生きた光が、布漉(ヌノゴ)しに皮膚に照るのを感じたり、
雪の乾いた窓玻璃に眼を放つては、
蟇蛙(ヒキガヘル)のいと惱ましげな戰慄(オノノキ)で顫へてゐたり。
（Les Assis）

と嘲笑したくもなつたのであろう。知性分別の世界にのみ生きる人間は太陽の生きた光も布漉しにしか感じ得ず、その惱ましげなおののきも、蟇蛙のおののきにすぎない老耄先生にも似ている。しかしランボオもまた木や石ではない。フランスの社會の中に生れ、知性をもつて生れた人間である。

Le jeune homme dont l'œil est brillant, la peau brune,
Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu,
Et qu'eût, le front cerclé de cuivre, sous la lune
Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu,
Impétueux avec des douceurs virginales

Et noires, fier de ses premiers entêtements,
Pareil aux jeunes mers, pleurs de nuits estivales,
Qui se retournent sur des lits de diamants ;

Le jeune homme, devant les laideurs de ce monde
Tressaille dans son cœur, largement irrité,
Et, plein de la blessure éternelle et profonde,
Se prend à désirer sa sœur de charité.

その若者、眸は輝き、皮膚は褐色
裸のままで歩いてもよい二十歳(ハタチ)の見事な肉體をして、
額は赤毛に縁どられ、月光の下、ペルシャの國で、
或る未知の精靈を禮拜したとおぼしき若者、

童貞らしい陰鬱な優しさを帶びて、しかも慓悍、
生れながらの頑固な性格に誇りをもち、
ダイヤモンドの地層の上で反轉する、
夏の夜の涙、若々しい海にさながら。

この若者、現世の諸々の醜さを前に、
いとも苛立つ心の中でぞつと顫へ
永遠に消え去らぬ深い傷手を身に負うて、
己れの看護修道尼を渇望し始める。 〔看護修道尼〕

知性分別の世界を嘲笑するだけではすまない。かかる世界は醜く、永遠の傷手をおえる世界である。しかし自己もその中の一人である。しかも「別の宇宙」なる超知性、無分別の大自然を垣間見た人間である。そこにこのランボオ自身かと思われる若者は「現世の醜さ」にふるえ「永遠に消え去らぬ傷手」を負い、看護修道尼を渇望せねばならなくなるわけである。かかる世界の象徴でもあるパリは「おお苦惱(クルシミ)の大都會、息も絶え絶えの大都會」(O cité douloureuse, ô cité quasi morte,―― (Paris se repeuple) であり、嘔吐をもよおす不潔、不健康そのものであり(七歳の詩人たち)、僞善の世界である(タルチュフ懲戒)。かかる世界はまたランボオには外道魔黨の踊りとも見えたのである(首吊りの舞踊會)、あるいはまたかかる世俗は王、首相、軍隊にも象徴される。これらに對するはげしい憎しみがなげかけられているのも當然のことといえよう。(「鍛冶屋」、「巴里の軍歌」、「ザールブルックの赫々たる戰勝」。)

このように「永遠に消えさらぬ深い傷手」を負つて、「血の滲んだ額」はしかし自然に向けられている(看護修道尼)。そこに

Et, comme il est du ciel, il scrutera les cieux !
………………
Le Monde vibrera comme une immense lyre
Dans le frémissement d'un immense baiser !……

天に屬する彼のことゆゑ、いづれは天を究めるだらう!
………………
さすれば世界は巨大なる竪琴のやうに搖れ動くだらう、
素晴らしい接吻(クチヅケ)を浴びてわななきながら! 〔太陽と肉體〕

と希望をいだくこともでき、同「太陽と肉體、四」のように愛の一陽來福を想うこともできたわけである。

そこに世俗からの「出發」「出奔」を想うのであるがその出發出奔に

は必然的に「兇暴な孤獨が己れの上を歩き廻るのを彼は感じ」ねばならない Il sent marcher sur lui d'atroces solitudes.（看護修道尼）。何故なら

Alors, et toujours beau, sans dégoût du cercueil,
Qu'il croie aux vastes fins, Rêve ou Promenades
Immenses, à travers les nuits de Vérité,
Et t'appelle en son âme et ses membres malades
O Mort mystérieuse, ô sœur de charité.

かくてなほ、常に穩かに、茫漠たる最後(イヤハテ)の日の
棺(ヒツギ)を厭ふ氣配もなく、眞理の夜を幾つも横切つて、
はてしなく辿る夢想や逍遙
そしてその魂に、その病める手足の中に彼は呼び寄せる、
神秘な死神、おお、これぞまことの看護修道尼、

その出發、出奔は一切を否定しつくすことを前提とするからである。それこそランボオのもとうとした兇暴なる哲學であり、そこに感じられる孤獨が兇暴なる孤獨であつたわけである。一切を否定しつくすところに Mort mystérieuse が現われるが、しかもそれこそ、「世の女人」ではなくして、それこそがこの病める手足にとつて魂にとつての看護修道尼であるわけである。何故ならこの一切の否定を媒介として、死を媒介として、彼の想つてやまなかつた大自然があらわれ得るわけであるから。「棺」を厭うわけはない。そのはてしない夢想や逍遙は常に穩かである。そこにこそ絶對の安らぎ、無畏の世界が現出するであろうから。

——この絶對の安らぎ、無畏の世界は酩酊船以後において、もつとはつきりとした言葉で、いろいろな言葉で展開せられてくる。——この一切を否定しつくそうとするランボオの「兇暴なる哲學」は、大般若の絶望的な否定を思わせるものがある。

かくてランボオは一切を否定しつくすことによつて出發、出奔を想うのであるが、この出發出奔をうたつた「七歳の詩人たち」(Les Poètes de sept ans) ——日常界の不潔、不健康、優しさを嫌悪し、大沙漠の自由を想い、神は愛しないが場末の街の菜葉服を着た自然人を愛し、そして、「下界に高まる巷のざわめきをよそにし、彼はただ一人、生布の敷布に寢ころんで、はげしくも帆布を豫感してゐたのだ！」Tandis que se faisait la rumeur du quartier, / En bas, —— seul, et couché sur des pièces de toile / Écrue, et pressentant violemment la voile! —— にはかなり顯著に酩酊船の直接の先驅を見出し得るように思われるのである。ことに最後の一句の「はげしく帆布を豫感」しているところにそれが感じられるのである。酩酊船の先驅といえば、「盗まれた心臓」の中の「おお、摩訶不思議な海の波よ、僕の心臓を手にとつて、どうか洗ひ淨めてくれ！」O flots abracadabrantesques, / Prenez mon cœur, qu'il soit lavé! の中にも海へのあこがれ、洗いきよめる海にその先驅を認めることができよう。あるいはまた「夕の祈禱」(Oraison du Soir) において、醉を求め、熱い夢に甘い火傷をうけ、どうにもたまらぬ要求をぶつ放そうと冥想しては、「晴々と褐色の空に向つて高々と遙かに放尿」する解放感をうたつているところにも同様顯著な酩酊船の先驅を認め得るであろう。もちろん先驅といえば酩酊船以前のほとんどすべての詩が先驅であ

り思想的先驅であるが、此等においては特に直接の、語句につながる先驅がみとめられるのである。

ランボオの想つてやまなかつた世界が原始太古につながる大自然であり、それは超倫理、超知性の世界であり、絶對の安らぎ無畏の世界であり、かくて社會性知性に基く一切の二元對立の世界、日常世界を否定しつくそうとする兇暴なる哲學をもとうとしたのであるが、かかるランボオの世界と連關して最後に注目すべきは「最初の聖體拜受」Ⅸ Les premières Communions Ⅸ において

Alors l'âme pourrie et l'âme désolée
Sentiront ruisseler tes malédictions.
……………
Christ, ô Christ, éternel voleur des énergies,
……………

かくてキリストよ、腐敗した魂や悲嘆に暮れた魂は
汝の呪咀が滔々と流れてくるのを感じるだらう。
……………
キリストよ、おおキリストよ、人間精力の永遠の盗人よ。
……………

かかる反キリスト的思想が表出せられていることである。それは同じく「最初の聖體拜受」の冒頭にある

Vraiment, c'est bête, ces églises de villages
……………

ほんとに阿呆臭いものさ、村の教會といふとこは、
……………

や、また「教會に集ふ貧乏人たち」Les Pauvres à l'Église において

Farce prostrée et sombre aux gestes repoussants ;
——Et l'oraison fleurit d'expressions choisies,
Et les mysticités prennent des tons pressants,
……………

いやな身振りの、氣の抜けた、この陰鬱な茶番劇。
——さてお祈りは選り抜きの美辭と麗句で花ひらき、
神秘性はひしひしと迫るやうな調子を帶びる。
……………

のごとく教會を茶番劇と見ているような言葉を、單に教會に對する反感冷笑と見るとしても、「最初の聖體拜受」Ⅸにおける言葉はそうはとれない。これは單に教會に對する反感ではなくキリスト教そのものに對する否定的言葉と見なければならないもののようである。このことは酩酊船以後において疑うことのできない明確な言葉となつて現われてくることによつて確められるのである。たとえば「惡胤」Mauvais Sang における「Je ne me vois jamais dans les conseils du Christ ; ni dans les conseils des Seigneurs,——représentants du Christ」（基督の教のなかにも、基督の様な顔をした高貴な方々の教の中にも、この俺は斷じて見つからない。」あるいは「非望」L'impossible における「M. Prudhomme est né avec le Christ.」（「お利口な方々」は基督と一緒に生れなすつた。）のような言葉においてその反キリスト思想は疑を入れる餘地がない。これらの點から考えてみれば前掲の「最初の聖體拜受」Ⅸの言葉はもちろん反キリスト的言辭として解釋されねばならない。その冒頭の言葉や「教會に集ふ貧乏人たち」の言葉も教會に對する言葉ではあるが、その

奥にやはり反キリスト教的思想があるものと見てよいであろう。

しかし反キリスト教的であるということは非宗教的であることを意味しない。ベディエとアザールの文學史においてはランボオは宗教に對して hostile であると言つているが、ランボオは優れて宗教詩人であつたといえる。「ジャンヌ・マリーの手」Les Mains de Jeanne-Marie で

Ah! quelque fois, ô Mains sacrées,
A vos poings, Mains où tremblent nos
Lèvres jamais désenivrées,
Crie……

ああ、聖なる手よ、僕たちの
醒めることなき陶醉の唇がそこに顫へる手よ、
時折……

云々

というように聖なる手を求めているのである。この聖なる手は「淫賣の女たちの首を絞め、脂粉にまみれた貴婦人たちの手を砕く」手であり、「無垢の少女をふりかへらせる」手ではあるが、この手の肉は

Leur chair chante des Marseillaises
Et jamais les Eleisons!

讃美歌（エレーソン）など斷じて唱へず、
マルセイエーズを歌ふのだ！

また

Une tache de populace
Les brunit comme un sein d'hier;
Le dos de ces Mains est la place
Qu'en baisa tout Révolté fier!

この手はしなびた乳房のやうに、
賤民の汚點（シミ）で茶色に染まつたのだ。
この手の甲こそ昂然たる
反逆の徒が接吻（クチヅケ）した場所！

といつているように、聖なる手であつて讃美歌は斷じて唱えない、そして賤民のしみで茶色に染つて、昂然たる反逆の徒の接吻した場所である聖なる手である。ランボオの愛した賤民は醜くはあつても、大自然としての人間であり、ランボオは世俗的二元對立の世界から見れば一切を否定しつくそうとする反逆の徒であつた。かかる賤民のしみにそまつた聖なる手は大自然としての聖なる手であり、かかる反逆の徒の接吻した聖なる手は二元對立の世界を超えた聖なる手であるはずである。かく解すれば、ランボオが反キリスト教的であつたことと、聖なる手を求めたことは決して矛盾しない。それは反キリスト教的というより超キリスト教的であつたというべきであろうか。この點に關しては酩酊船以後のものにおいて、より明確になるであろう。

II　酩酊船以後

かくて酩酊船に至るのであるが、それはIIIにゆずつて、酩酊船以後について考えて見よう。酩酊船以後は大體にいつて「酩酊船以前」の展開と見られるが、なお重要な轉換が見られるようである。

この期においても大自然、太古の世界への憧れは依然としてはげしい。地上の國々は太陽に見捨てられた國々であるが、然し「俺の魂（こころ）は雖

ひ上る……天の雲の下を」mon esprit vole…sous les nuages célestes…そしてそこに見えるのは安らぎの國「黄色い森と明るい谷」、「青い眼相の人妻と赤い額のその夫、おおゴールよ、そして二人の足元に踰越祭の白仔羊、これぞミシェルとクリスチーヌ」(Michel et Christine) である。このミシェルとクリスチーヌは「ランボオ全集」の脚註にあるように古代の男と女との象徴的な名前であろう。この大自然、太古の世界への憧れは知性のけがれをしらぬ蠻地への憧れとなる。

Moi——Mourir aux fleuves barbares.

……………

Moi——Aller où boivent les vaches.

……………

Moi——Ah! tarir toutes les urnes!

俺——蠻地の河でくたばりたい。

……………

俺——飲むなら牝牛の飲むところで。

……………

俺——いつそ甕（カメ）といふ甕が干したいものさ。

(Comédie de la Soif. I)

古代の消滅して跡形もとどめぬ街をなげき（飾畫—街）、ヨーロッパを失つて「あの親しい祖先の人々がしたやうに大酒をのむ」こと想うのである（地獄の季節—悪胤）。それは「生れたままの人間」（同—悪胤）「原始の自然本然の姿」（飾畫—放浪者）があるからであり、そこには「豌豆のさ緑の生命（イノチ）の息吹」（聴け波羅門僧の如く）をきくことができるからである。かくてランボオは「けものの至福を羨む」のである。

J'enviais la félicité des bêtes,—— les chenilles, qui représentent l'innocence des limbes, les taupes, le sommeil de la virginité! (Délires II)

人間はけものではない。しかし人間であつて人間たることを失わずして、且つけものたらんとすることは、いやさらに木石たらんとすることは古來多くの宗教人、ことに佛教者の求めた世界であつた。けものの至福を羨む心は大自然、太古への憧れ、蠻地への憧れの一つの現われではあろう。それの展開ではあろう。がまた簡單にそう割りきつてはしまえない重大な飛躍がここに見られるようにも思うのである。ランボオにおける大自然、太古への憧れはその初期からロマンチストのそれではなかつた。それは超知性、超倫理の世界、絶對の無畏安らぎの國としての太古、大自然であつた。その限りにおいてこのけものの至福を羨む心は、「酩酊船以前」の必然的展開とはいえる。しかし酩酊船以前にはこの境地にまではまだ到達していなかつたこともまた確かなことといえよう。しかし、まだこれだけでは結論は早いと言われるかもしれない。いま少し「以後」の世界の展開をあとづけてみよう。

かかる自然を求める心は「酩酊船以前」にも見られたように、一切を否定しつくそうとする一種の兇暴となつてあらわれる。「地獄のすすりなき、それが一體何だつて？ 企業家、殿様、元老院、滅びてしまへ！權力も、正義も、歴史もあるものか！……ああ、世界中の共和國！ 皇帝陛下よ、聯隊よ、阿呆大佐よ、民衆よ、もう澤山だ！」……（俺の心よ、血と燠の）。

ここにおいては一切世界が崩壊する。その前半においては酩酊船以前の場合と同じく世俗、日常界の否定であるが、その後半においては、それを含めて一切合切の崩壊である。

Europe, Asie, Amérique, disparaissez.
Notre marche vengeresse a tout occupé,
Cités et campagnes!――Nous serons écrasés!
Les volcans sauteront! Et l'Océan frappé……

Oh! mes amis!―Mon cœur, c'est sûr, ils sont des frères:
Noirs inconnus, si nous allions! Allons! allons!
O malheur! je me sens frémir, la vieille terre,
Sur moi de plus en plus à vous! la terre fond.
((Ce n'est rien: j'y suis; j'y suis toujours))

ヨーロッパ、アジア、アメリカ消え失せろ。
恨みに燃えた進軍は一切合切占領だ、
都會も田舍もあるものか! 俺らのこの身は碎け果て!
火山は跳び上り! 海は湧き……

おおわが友よ!――わが心、たしかに奴等は兄弟だ
お見知り申さぬ黒奴さん、死なばもろとも! 行けや! 行け!
おおいたましや! 俺は知る、老いぼれた大地の震きは、
次第々々に高まつて! 大地は遂に崩れ出す。

《何でもないや、俺は居る、相も變らず俺は居る》

「大地も遂に崩れだす」のである。「酩酊船以前」においても「看護修道尼」において死神こそ看護修道尼としているところに一切を否定しようとする思想は明かに伺えるのだが、「俺の心よ血と燠の」に比しては、まだいささか觀念的である傾向が見られぬではない。ここにおいてはもはやそういう傾向を完全に脱した確固たる信念が見られるようであり、その意味で一段と徹底化せられているように感じられるのである。それだけにまたいかにもランボオらしい否定のはげしさが感じられる。しかしさらに注目すべきことは「看護修道尼」においては一切の否定に終つているのに對して、「俺の心よ血と燠の」においては、最後に「何でもないや、俺は居る、相も變らず俺は居る」ce n'est rien: j'y suis; j'y suis toujours なる言葉の見られることである。ここに「看護修道尼」には全く見られなかつた一面、新しい飛躍が見られるのである。「俺らのこの身は碎け果て」「大地は崩れだし」一切は崩壞し一切が空に歸して且つ「何でもないや、俺は居る」。そこにこの虚無は單なる虚無ではないことが伺える。この虚無はまた一切肯定を意味する。否定は卽肯定に轉ずる。

「飾畫」――「小話」Conte において「ある『王子』はただ何の奇もない贅澤三昧に日を暮して來たことを思つてむかむかした」――世俗嫌惡――「彼は眞實が見たかつた、本質的な欲望と滿足との時が得たかつた」「彼を知つた女達はすべて殺された」――ランボオにおいて女は世俗の象徴となつている。(「記憶」Mémoire「錯亂1」Délires I「看護修道尼」參照)――「狩の後に、或は飲酒の後に、彼は從ふ人々をすべて殺した。――だが皆彼のあとを追つた。高價な動物の喉を割いて樂んだ。宮殿を燒いた。人々の頭上に跳りかかつて、彼等をずたずたに斬つた。」――一切否定――「だが群集も金色の屋根も美しい動物もやつぱりなくならかつた。」「ある夕方、彼は昂然として馬を驅つた。と、何ともいひやうのない、いや言つてはならないほど麗しい一人の『天才』が姿を現した。」『王子』と『天才』とは、恐らくは、眞の健康の裡に、互に刺違へた。

……二人は一緒に死んだ。」Le Prince et le Génie s'anéantirent probablement dans la santé essentielle……Ensemble donc ils mourrent「『王子』は『天才』であつた。『天才』は『王子』であつた。」Le Prince était le Génie. Le Génie était le Prince 一切否定の王子は單に破壞の裡に恍惚となることもできなかつたし、殘虐によつて若返る事もできなかつたのである。「幸福、愛の約束を放つ」天才、一切肯定との遭遇により眞の健康を獲得して、王子と天才とは刺違えて一緒に死んだ。王子は天才であり天才は王子であつた。否定卽肯定、肯定卽否定であつた。しかもその王子は「その宮殿で、尋常の齡、天壽によつて身罷つた」のである。王子はまた、一切衆生の一人であつた。佛教の言葉を借りるならば一切衆生悉有佛性であつたわけである。

「飾畫」——「生活」において「俺の虛無とはそもそも何か。」「刺々しい野原の倹しい空氣に兇暴な懷疑を養はれ」「新たな煩惱に身を献げ、ただ奸佞な狂人 méchant fou となるのを待つばかりだつた」この「俺」は「東洋全土で圍まれた壯麗な住居で dans une magnifique demeure cernée par l'Orient entier 自分の大業を完成して赫々とした隱遁を過した。」「再び務めはこの手に戻つた。これについては夢みる事すら許されぬ。Il ne faut même plus songer à cela. 本當に墓場の向ふから來たこの俺だ。Je suis réellement d'outre-tombe.」

再び務めが手に戻つたこの「俺」は「墓場の向ふから來た」「俺」である。否定に媒介された肯定である。單なる否定に終つてはいないのである。さらに墓場の向うから來たこの俺の「務」は夢みることすら許されない性質のものである。卽ち自己に對するものとして對象化してみることのできないものである。「大賣出し」Solde の中でも「不可見の光彩、不可知の歡喜への狂氣じみた、無際限の飛躍」Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices insensibles,……といつている。對象化することは二元對立の世界においてのことである。この二元對立界は一切合切否定しつくされる。そこに出てくる絕對はまだ相對的たるをまぬがれない。對象化される。さらに轉換的にこの否定の底から出てきた肯定はもはや二元對立の世界を超えた世界である。かくして「墓場の向ふからきたこの俺の務めは夢みることすら許されぬ」という所以である。この點は酩酊船以前には全く見られなかつた思想の一つであり、十分に注意されてよいものと思う。

なお「地獄の季節」——「別れ」で、「もう秋か。——それにしても何故に永遠の太陽を惜むのか、俺達はきよらかな光の發見に心ざす身ではないのか、——季節の上に死滅する人々からは遠く離れて。」といつて後「この俺、嘗ては自ら全道德を免除された道士とも天使とも思つた俺が、今、務めを搜さうと、その粗々しい現實を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。」Moi! moi qui me suis dit mage ou ange, dispensé de toute morale, je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre! Paysan! といつている。確かにランボオは、全道德を免除された道士あるいは天使と思つていたにちがいない。ランボオの立場はその初期から倫理を超えた立場にたつていたから。かくて知性を否定し、倫理を超え、一切合切を否定しつくそうとする兇暴さをもち、兇暴なる孤獨を感じたのであつた。しかし今一切合切を否定しつくしたところに肯定的轉換が生じたのであつた。かくて「務めを搜

さうと、この粗々しい現實を抱きしめようと土に歸る」のである。この現實以外に現實はないわけである。粗々しくとも、醜怪であろうとも、そこにこそ眞實があり、絶對の安らぎがあるわけである。だからして「最後に、俺は自ら虚僞を食ひものにしてゐた事を謝罪しよう。さて行くのだ。」Enfin, je demanderai pardon pour m'être nourri de mensonge. Et allons. というわけである。また「頌歌はない、ただ手に入れた地歩を守る事だ。辛い夜だ、乾いた血は、俺の面上に煙る、このいやらしい生身の外、俺の背後には何物もない。……流れ入る生氣とまことの溫情とは、すべて受けよう。曉がきたら俺達は、燃え上る忍辱の鎧を着て、光り輝やく街に這入らう。」 Point de cantiques : tenir le pas gagné. Dure nuit! le sang séché fume sur ma face, et je n'ai rien derrière moi, que cet horrible arbrisseau!……Recevons tous les influx de vigueur et de tendresse réelle. Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons aux splendides villes. このいやらしい生身の外、俺の背後には何物もない立場にまで遂にランボオは到達したのである。憎惡し否定し去つた街も今は光り輝く街となつて「忍辱の鎧を着て」這入ろうとするのである。かくて「俺の心よ、血と燠の」において、ふれるもの凡てをなぎ倒さんの勢で一切合切否定しつくしたその果てに「遂に大地も崩れだし」、一切が空に歸した瞬間「何でもないや、俺は居る、相も變らず俺は居る」といつた急轉直下の大轉換の意味も疑いもなく把握することができるわけである。

ここで例のヴォアイアンの手紙を想い起してみよう。「僕は詩人になりたいのです。そしてヴォアイアンになりたいと努めてゐます。……凡ゆる官感を放埒奔放に解放することによつて未知のものに到達することが必要なのです。……『吾れ』は他者であります。」（一八七一年五月、イザンバアル宛、ランボォ全集、書簡八、參照）「『われ』とは他者であります。……このことは僕には明白です。僕は思想の開花期に臨んでゐます。それを凝視め、それに耳を傾けてゐます。……人間の歩みはこのやうに進み行き、人間は努力をせず、未だ眼醒めず、といふよりは、偉大な夢の完璧な世界に未だ入つてゐなかつたのです。お役人や著述家ばかりで、作家、創作者、詩人、と呼ぶべき人間は決して存在しなかつたのです！　詩人にならうと志す人間の第一番の仕事とは自分自身を全的に認識することです。……僕はヴォアイアンであらねばならない。自らをヴォアイアンたらしめねばならぬ、と言ふのです。『詩人』は凡ゆる感覺の、長期にわたる、大がかりな、そして理由のある錯亂を通じてヴォアイアンとなるのです。……そこで彼はあらゆる偉大な病者、偉大な罪人、偉大な呪はれ人の仲間入りをし、――そして至高の『賢者』となるのです！　――何故なら彼は未知のものに到達するのです！……『詩』はもはや行動を韻律化するものではないでせう。詩は先驅するものとなることでせう。……」（一八七一年五月十五日、ドゥムニー宛、同書簡九、參照）

一八七一年五月は酩酊船に少し先立つ時期である。このヴォアイアンについて、ベディエとアザールの文學史では「感覺的宇宙の外觀を超えて絶對と純一とを探究するもの」と説明している（Cf. Bédier et Hazard : Histoire de la littérature française, II）。ヴォアイアン、見者がこの絶對と純一との探究者であつたことは疑を入れる餘地はない。そ

してそれが感覺的宇宙の外觀の向うにあるものであつた事も事實であろう。感覺的宇宙の外觀とは知性に基く二元對立の世界である。煩惱、不安の世界である。ここに眞實はなく、絶對の安らぎはない。したがつてそこに「官感の放埒奔放」が求められ、「感覺の長期にわたる、大がかりな、そして理由のある錯亂」を必要としたのである。二元對立の世界から見ればそれの徹底的破壞であるからには錯亂ではあろうが、それは絶對純一の世界、未知の世界に到達するための必須の段階であつて見れば、正に「理由のある錯亂」であるわけである。それは知性と社會がわれわれをとじこめた埒を放つ事である。ここに一切合切の否定が始まる。この否定は「偉大な病者、偉大な罪人、偉大な呪はれ人」として罪の意識がなければならない。かくて主觀と客觀の對立を超えた一元の世界、主觀と客觀とが依つて立つ根源的絶對と純一の世界への道が開かれる。そこでこそ「われは他者」という認識が成立したのである。その世界こそ詩の泉であるとすれば、「至上の美味の砂糖菓子」（酩酊船參照）であるとすれば、詩はもはや「行動を韻律化するもの」ではなく、正に「詩は先驅するもの」となるわけである。卽ち根源的絶對と純一の世界の象徴となるわけである。かくしてランボオの求めたヴォアイアンたることは、主觀、客觀を超えて、主觀、客觀の依つて立つ根源的絶對と純一の世界に立つことであつて、そこに詩の泉を求め、詩を先驅するものとして考えたわけである。しかしこの絶對と純一の世界はあるものは此を彼岸に求め、あるものは此を此岸に求める。ランボオはそのいづれにこれを求めたのであろうか。「酩酊船以前」においてはこの點あまり明確ではないようである。日常世俗界の憎惡否定、知性の否定、絶對、純一の世界の象徴たる太古自然への憧憬、出發への想いは明確ではあるが、その希求した世界が彼岸であるのか此岸であるのかという點になると明確ではない。一見すると彼岸的であるように思われる傾向は强い。酩酊船自體がその前半においてかかる世界を展開している。さきに引用した「別れ」の中での「俺は自ら虚僞を食ひものにしてゐた事を謝罪しよう。」なる言葉は酩酊船以後の立場からみてその以前における彼岸的立場に對する反省から出發した言葉と受けとることもできよう。しかしまた一方、その初期から見られる反キリスト教的思想は、此岸的であつたのではないかということを示唆するものである。ニーチェが「悲劇の誕生」において說くように、「キリスト教は最初から本質的且つ徹底的に、生に對する嫌惡、倦怠であり、それが別の、あるいはより善き生に對する信仰をもつて身を包み隱し、飾り立てたに過ぎない。現世に對する憎惡、熱情に對する呪咀、美と感情に對する恐怖、此岸を一層よく誹謗せんがために發明せられた彼岸」であるとすれば、このキリスト教に對する反乃至は超越の思想をいだいていたことは、あるいはランボオが當初から此岸的であつたのではないかとも思わせるのである。然しまた此岸的であるにしては積極的な肯定面があまりに稀薄であつたようにも思われる。むしろその「兇暴」に近い否定的面が强く出てくるので、彼岸的であつたかともうけとられやすいのであるが、それにしては反キリスト教的思想がやや說明困難となつてくる。かくして酩酊船以前においてはこの點ランボオ自身あまり明確になつていなかつたものと解釋するより外はない。しかし酩酊船以後の期においては、すでに述べた諸例に示されるようにこの點明確に此岸的思想を表明しているのである。「酩

酊船以前」と比較して區別されるべき最も重要な一つの點ではなかろうかと考えるわけである。

このようにランボオにおいては否定は肯定となり、現實肯定的となる。しかしこの現實肯定は直接的肯定ではなく否定を媒介とする現實肯定である。したがつてこの期においても當然知性を否定し世俗を否定する。

Tant que la lame n'aura
Pas coupé cette cervelle,
Ce paquet blanc, vert et gras,
A vapeur jamais nouvelle,

(Ah! Lui, devrait couper son
Nez, sa lèvre, ses oreilles,
Son ventre! et faire abandon
De ses jambes! ô merveille!)

Mais, non ; vrai, je crois que tant
Que pour sa tête la lame,
Que les cailloux pour son flanc,
Que pour ses boyaux la flamme,

N'auront pas agi, l'enfant
Gêneur, la si sotte bête,
Ne doit cesser un instant
De ruser et d'être traître,

Comme un chat des Monts-Rocheux,
D'empuantir toutes sphères!
Qu'à sa mort pourtant, ô mon Dieu!
S'élève quelque prière!

變りばえせぬ湯氣たてて、
白くて生で脂ぎつたこの荷物、
この腦味噌奴をば、刄もて
えぐりとらないかぎりは

(ああ、奴め、切らずばなるまい、
その鼻を、臀をも、耳も、その腹も!
棄てずばなるまい、その足も!
おお、すばらしや!)

それでも駄目だ、本當に、俺は思ふ、
奴のあたまをたたき切り、
奴の腹には石を詰め、
五臓六腑を火炙りに、

しないかぎりは小うるさい
金てこ頭の小僧つ子が
たくらみしたり裏切つたり
寸時もやめる筈がない、

ロッキイ山脈の猫みたいに、
あたり一面臭くする!

とはいへ、奴がくたばる時は、
　お祈りらしい音も出ますやう、神様よ！

(Honte)

ここに徹底的な知性の排除が見られる。その他、「飾畫」——「苦悶」で「安樂な終り fin aisée が、俺達の宿命的な拙劣無能の恥辱の上に、俺達を眠らせることなどあり得ようか。」この世俗的な意味での安樂な終り、成功を無意味なものとし、同「デモクラシー」で「この土地はおさらばだ、何處へでも構はぬ。善良な意欲をもつ壯丁である俺達は、猛惡な哲學 philosophie féroce を持たう。學問 science には文盲に、歡樂は身を裂いても求めよう。歩み行くこの世とは決裂だ。これこそ眞の發展だ、前進せよ。出發だ。」あらゆる知性、論理と決裂して出發、前進を想う。この知性に基く二元對立の日常界には眞の安らぎはないわけである。

　しかしランボオにおいてはもはや否定一方ではない。否定を媒介としたこの現實肯定には行雲流水にも比すべき安らかさと自在がある。

Mais fondre où fond ce nuage sans guide,
—Oh! favorisé de ce qui est frais!
Expirer en ces violettes humides
Dont les aurores chargent ces forêts?

よし、當所ない浮雲の、とろける處でとろけよう。
——ああ、爽かな、爽かなものの手よ。
露しいた菫のなかでこと切れよう。
明け方が、森の色に野も山も、染めてくれぬとは限るまい。

(Comédie de la Soif. V.)

こういう詩が今までのフランスの詩史の中に一度だつて現われた事があつたのであろうか。淺學の門外漢である私にはよくわからないが、この一節は禪家の偈を思わせるものすらある。

L'eau claire;……
……………
Eh! l'humide carreau tend ses bouillons limpides!
L'eau meuble d'or pâle et sans fond les couches prêtes.
Les robes vertes et déteintes des fillettes
font les saules, d'où sautent les oiseaux sans brides.

淸らかな流れ。……
……………
おお！　玻璃に似た水面は透んだ水泡を一面に浮べてゐる！
蒼ざめた金の流水、底しれぬ床を敷きのべて。
岸の柳は綠の色あせた衣をつけた村娘か、
そこから、小鳥の群は絆もなしに天翔ける。

(Mémoire)

この淸らかな金の流れには底はなく sans fond、天翔ける小鳥の群には何の絆もない sans brides。「俺の背後には何物もない」(別れ)といつたようにランボオは無底の深淵に臨んでいるのであり、そこにはランボオを拘束する一切の絆はない。

　「轉々ところげ廻るのだ、人を疲れさせる風にのり、海を渡つて、傷口の上を。生命を奪ふ水と風との沈默の中で、刑罰の上を。凶暴にうねりを上げる沈默の裡に、嘲笑ふ拷問の上を」(苦悶)。罪を背負つて、實に風のまにまに、浪のまにまに轉々するのである。そこには何の拘束も

ない。禪家のいう無所住であろう。

だから

Qu'on patiente et qu'on s'ennuie
C'est trop simple. Fi de ces peines.
Je veux que l'été dramatique
Me lie à son char de fortune.
Que par toi beaucoup, ô Nature,
——Ah moins seul et moins nul!—— je meure.
Au lieu que les Bergers, c'est drôle,
Meurent à peu près par le monde.

やれ忍耐だの退屈だのと
藝もない話ぢやないか！……チェッ苦勞とよ。
ドラマチックな夏こそは
『運』の車にこの俺を、縛つてくれるでこそよろし、
自然よ、おまへの手にかかり、
—ちつとはましに賑やかに死にたいものだ！
ところで羊飼さへが、大方は
浮世の苦勞で死ぬるとは可笑しなこつた。

かく運命のままに、自然の中に死せんことを想うのであり、羊飼が浮世の苦勞で死ぬとは解せぬ可笑しな事に外ならぬわけである。

運命のまにまに、自然の中に死せんことを想う無所住の境地はそのままが旅である。「二人は旅をしよう。無人の境に狩をしよう。見知らぬ街々の舖石の上にも、なげやりに苦もなく寢てしまはう。」（地獄の季節——錯亂Ｉ）

かくてこそ「俺の生活は一體目方が掛からない」ma vie n'est pas assez pesante（地獄の季節——錯亂）、「心身の輕るさ」si gai, si facile,（忍耐の祭——四、黃金時代）を實感として感じたのであろう。

かかる世界はまた、佛教の言葉を借りるならば無所去、無所從來の無邊際界である。「家を開け放つた天才、愛情であり現在であり未來である天才、淸淨であり魅惑であり歡喜である天才、知性の世界には存しない再創始された完全な尺度 mesure parfaite et réinventée であり、豫見を許さぬ驚くべき理智 raison merveilleuse et imprévue たる愛情であり永遠である天才——かかる天才はランボオの求めた宗教的世界の象徵である。——この天才は『何處にも立ち去りはしまい、空から下りても來まい、女共の憤怒と、男共の上機嫌とこの罪業全部との、贖ひを遂げようともしまい。何故なら、彼が存在し、愛されてゐる限り、もう出來てゐるのだから』Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel, il n'accomplira pas la rédemption des colères des femmes et des gaîtés des hommes et de tout ce péché : car c'est fait, lui étant, et étant aimé.」「おお、彼の息、頭、足なみ、諸々の形態の完成され、行動の行はれる、恐るべき迅速さ。おお精神の豐富と宇宙の廣大無邊 O ses souffles, ses têtes, ses courses ; la terrible célérité de la perfection des formes et de l'action. O fécondité de l'esprit et immensité de l'univers!」(Génie)。

一切のはからいなく、棹さす事もなく風のまにまに浪のまにまに安らかに流れ行く無所住の世界は、凡ての時、凡ての所が現在であり、中心である。彼岸ではなく此岸であれば、それは空から下りてくるわけはな

い、流れ行くままのこの時この所に絶對の現在があり、宇宙の中心がある。したがつて宇宙は廣大無邊、文字通り邊際はないわけである。流れ行くその時その時が、その所、所が絶對の現在であり、中心であれば、何處へも去りはしないし、何處から來るということもないわけである。「惡胤」においても『强氣にしろ、弱氣にしろだ、貴樣がさうしてゐる、それが貴樣の强みぢやないか。貴樣は何處に行くのか知りはしない、何故行くのかも知りはしない、處構はずしけ込むし、何が嫌だと言ふわけでもない。貴樣がもともと屍體なら、その上殺さうとする奴もあるまい』((Faiblesse ou force : te voilà, c'set la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas ; entre partout, réponds à tout. On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.)) 貴樣が今、現に、そうしている、そこにこそ絶對純一の世界が現成しているのである。弱氣にしろ、强氣にしろ、そこにこそ絶對が現成しているとすれば、それが貴樣の强みであるわけである。だとすればそこにこそ絶對の安らぎがあり、日々是好日となるわけである。同じく「惡胤」において「俺は惡を冒した覺えはない。俺にはその日その日は爽かに過ぎて行く、先き先き後悔する事もあるまい。幸福に會つては死人同然な俺の魂に、惱みの時が來ようとも思はれぬ、ここに葬禮の燭影にも似た、嚴めしい光が又浮びあがるのだ。Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, le repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments de l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère comme les cierges funéraires.」といつている。日々是好日はまた一期一會でもある。だから後悔する事もないわけである。眞に後悔することのない日々であつてこそ、その日その日は爽かに過ぎて行く。そこに嚴めしい光の浮び上るのを見たということは古來東洋西洋の宗教人の多くが語りつたえるところと共通している。

かかる安らぎは、絶對の安らぎであり、ゆらぐことのない根源的世界に根ざした安らぎである。それは言葉をかえて言えば無畏の世界でもあるわけである。

J'ai tant fait patience
Qu'à jamais j'oublie ;
Craintes et souffrances
Aux cieux sont parties.

私は隨分忍耐もした
決して忘れもしはすまい。
つもる怖れや苦しみは
空に向つて昨日去つた。

〔Fêtes de la Patience : 2, Chanson de la plus haute Tour〕

あるいはまた「辛い命を、てもなく愚かに生きようか、——萎びた拳を揚げ、棺の蓋を取除き、腰を下して、息絶えて。そして老いもなく危さもなく。」La vie dure, l'abrutissement simple, —— soulever, le poing desséché, le couvercle du cercueil, s'asseoir, s'étouffer. Ainsi point de vieillesse, ni de dangers : ……（惡胤）

遂にここまでランボオは到達したのである。長い知性の傳統に培われたフランスの中にあつて、かかる無畏の世界を見出した事は全く驚嘆に値するのである。知性に基く二元對立の世界にはかかる無畏の安らぎは

得られる筈がないからである。かかる無畏の安らぎの世界に執着屈託のあろう筈はない。執着屈託のある所に怖れや苦しみが出る。だから

Je veux bien que les saisons m'usent.
A toi, Nature, je me rends;
Et ma faim et toute ma soif.
Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.
Rien de rien ne m'illusionne;
C'est rire aux parents, qu'au soleil,
Mais moi je ne veux rire à rien;
Et libre soit cette infortune.

季節々々がこの俺を使ひ減らしてくれればよい。
自然よ、此の身はおまへに返す、
こんな渇きも空腹(ひもじさ)も。
お氣に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。
俺は何にも惑ひはしない。
御先祖様や日輪様にはお笑草でもあらうけど、
俺は何にも笑ひたかない
ただこの不運に屈託だけはないやうに！

〔忍耐の祭―五月の軍旗〕

あらゆる執着屈託から解放されることを求める。執着屈託だけではない。欲求――追求する心それ自體が煩悩の出發點をなす。かくて「此の身を自然よ、お前にかへす。」「渇きも空腹も」というのである。渇き、空腹はもちろん欲求、追求の心をさすわけである。だからランボォは、

Ma faim, Anne, Anne
Fuis sur ton âne.
....
Mes faims, tournez. Paissez, faims,
Le pré des sons!
Attirez le gai venin
Des liserons;
....
—C'est l'estomac qui me tire.
C'est le malheur.

俺の飢餓よ、アンヌ、アンヌ
驢馬に乗つて失せろ。
....
飢餓よ、あつちけ。草を喰め、
音の牧場に！
晝顔の、愉快な毒でも
吸ふがいい。
....
—俺の袖引く胃の腑こそ
それこそ不幸といふものさ

〔Fetes de la Faim〕

あるいは

Là pas d'espérance,
Nul orietur.

もとより希望があるものか、

願ひの條（スヂ）があるものか、

かくてこそ「また見付かつた、何がだ？..永遠」といい得たわけである。

〔Fêtes de la Patience ; Éternité〕

あるいはまた

……………

J'ai fait la magique étude
Du Bonheur, que nul n'élude.

O vive lui, chaque fois
Que chante son coq gaulois.

Mais je n'aurais plus d'envie,
Il s'est chargé de ma vie,

Ce Charme! il prit âme et corps,
Et dispersa tous efforts.

Que comprendre à ma parole?
Il fait qu'elle fuie et vole!

……………

私の手がけた幸福の
秘法を誰が脱れ得よう。
ゴールの鷄（トリ）が鳴くたびに、
「幸福」こそは萬歳だ。
もはや何にも希ふまい、
私はそいつで一杯だ。

身も魂も恍惚（トロ）けては
努力もへちまもあるものか。
私が何を言つてるのかつて？
言葉なんぞはふつ飛んじまへだ！

……………

〔O saisons, ô châteaux〕

一切の希求をしりぞけるのである。希求の心のあるところに不幸が萠す。そこに眞の幸福、絶對の安らぎがあるわけであり、此が永遠の世界であり、永遠の世界の前には、言葉も「外道の言葉」にすぎず「言葉なんぞはふつ飛んじまへだ」というわけである。そして先述のように、一切衆生悉有佛性であるからには「私の手がけた幸福の秘法を誰が脱れ得よう」と立言することができたのである。無我の世界は無求の世界である。

かくて

Sur terre ont paru les feuilles!
Je vais aux chairs de fruit blettes.
Au sein du sillon je cueille
La doucette et la violette.

土から葉つぱが現れた。
熟れた果肉にありつかう。
畑に俺が摘むものは
野萵苣（ノヂシャ）に菫だ。

〔Fêtes de la Faim〕

や、また先きに引用した

Les salades, les fruits
N'attendent que la cueillette ;
Mais l'araignée de la haie
Ne mange que des violettes.

野菜のサラダや果物の
もがれる許りでゐるものを
垣根の蜘蛛めの食ふものは
ただ、紫の菫草

の一節の眞意を誤りなくくみとることができるであろう。ここに自然と合一した無求の世界をみることができるであろう。「もはや何にも希ふまい」といつている。かつてランボオは世俗を否定し、一切を否定したその向うに大自然を希求した。今やランボオにおいてはその大自然を希求する心すらなく、大自然の中に融合、合一してしまつていると見てよい。かくてこそ、既に述べたように「これについて夢みることすら許されぬ」il ne faut même plus songer à cela といつているような非對象化の思想をも眞に理解することができるであろう。眞に無求の世界は、もはや對象化することを許さぬのである。對象化する限りは、よしそれが永遠であつても、絶對純一の世界であつても、それは希求の對象である。希求の對象が存する限り無畏の世界は存しない。それはやはり一種の相對的世界であり、二元對立の世界であり、そこには眞の安らぎはないからである。このことは「言葉なんぞはふつ飛んじまへだ」といつている言葉と共に、後の彼の放浪生活を解釋する上に重要な手がかりを與えるものと思われる。

ここまでランボオの詩的世界を跡づけることによつて、さきに言つたように、ランボオが「けものの至福」félicité des bêtes を羨んだことの意味もまた正當に理解することができるであろう。此岸的な無所住、無畏、無求の世界はまた無心の世界であり、一種の嬰孩行でもある。したがつてランボオがけものの至福を羨んだことはむしろ當然のことといつてよい。

無所住の世界、雲のまにまに、風のまにまに、浪のまにまに、流れて止ることのない無心の世界にこそ無畏の絶對の安らぎがあつた。その世界は底もなく絆もない。(sans fond, sans brides) 邊際もない。一度停滯すれば一瞬にして崩壊する。停滯することは棹さすことであり執着することである。非無心である。そこには絶對の安らぎはない。かくてランボオの求めた安らぎは、いわば安住する場所のないところにこそあつたのだといわれねばならない。これこそ安住の場所として把えることのできるものであれば、もはやそこには安らぎはない。たとえそれが絶對であろうとも、これこそ安住の國として把えられたら、把えたその瞬間にもはや眞に絶對ではなく相對に墮する。したがつてそこには安らぎはない。だから、

Puisque de vous seules,
Braises de satin,
Le Devoir s'exhale
Sans qu'on dise : enfin.

繻子の肌した深江の燠よ

それそのおまへと燃えてゐれあ
義務(ツトメ)はすむといふものだ
やれやれといふ暇もなく

〔L'Éternité〕

このようにenfin（遂に）ということがないわけである。流れ行く一歩一歩に絶對が現成するのである。le Devoir s'exhale である。がこれを把えて對象化することは許さない。次ぎの一歩一歩に絶對を「せめ」ねばならない。enfin ということを許さない。

だから逆に無所住ならざる停滯には安らぎはなく絶對、永遠のないことを「記憶」の後半で述べている。

……………

Un vieux, dragueur, dans sa barque immobile, peine.

Jouet de cet œil d'eau morne, je n'y puis prendre,
ô canot immobile! oh! bras trop courts! ni l'une
ni l'autre fleur : ni la jaune qui m'importune,
là; ni la bleue, amie à l'eau couleur de cendre.

Ah! la poudre des saules qu'une aile secoue!
les roses des roseaux dès longtemps dévorées!
Mon canot, toujours fixe; et sa chaîne tirée
Au fond de cet œil d'eau sans bords,——à quelle boue?

……………

老い衰へた浚渫夫は、動かない小舟の中で、悲しんでゐる
僕はこの陰鬱な水の眼のもてあそびものだ、
おお、動かぬ丸木舟よ！、短かすぎる僕の腕よ！
どの花も摘むことが出來ない。心にかかる黄色い花も、灰色の水によく相應ふ青い花も。

ああ、一羽の鳥が羽ばたいて柳の花粉を揺りおとす！
葦原に咲くバラに似た花々はとつくに蝕まれてしまつた！
丸木舟はいつもつながれてゐる、その鎖をば
ひろびろとしたこの流れの眼の底に曳きずつて、どんなに泥深いかしら？

「淸らかな流れ」をもつて始り、この底もなく絆もない淸らかな流れをもつて無所住の絶對を象徴したこの詩篇においては、無所住ならざる停滯、もし今、能樂における世阿彌の用語を用いることを許されるならば「住劫」は、動かない小舟、動かぬ丸木舟をもつて象徴されている。「住劫」停滯の世界は、執着の世界であり、執着のあるかぎり、無畏、無求の安らぎは一瞬にして消え去り、相對に墮してしまう。ヴォアイアンの求めた絶對ははるか手のとどかぬ所に消え去る。かくて「短かすぎる僕の腕よ」bras trop courts! という嘆きが當然發せられる。腕が短いどころではない、「花々はとつくに蝕まれてしまつた」のである。sans fond, sans brides であつた「淸らかな流れ」に對して、今この丸木舟は Mon canot, toujours fixe であり sa chaîne tirée au fond de cet œil d'eau sans bords である。鎖を底に引きずつているのである。もはや定着、停滯した丸木舟にとつては本來 sans fond であるべき淸らかな流れに底ができ、その上鎖を引きずつているのである。ランボオにとつて

かかる停滯「仕劫」の世界に對して à quelle bone という言葉はさぞかし實感をもつて迫つてきたのであろうと思われる。

かくして彼岸ならぬ此岸に、安住地のない眞の安らぎを、無求、無畏、無心の、嬰孩行ともいうべき安らぎを得て、「その日その日が爽かに過ぎて行く」。そこに「羅禮の燭影にも似た嚴めしい光が浮び上る」のを見た。これは既に述べたように、多くの宗教人に共通の表現であるところからしてランボオにおいても、恐らく實感として、體感として感ぜられたものに違いあるまい。「少年時」においても「煩惱の時の來る毎に、この身を、碧玉（サファイア）の球體、金屬の球體と想ひなす。俺は沈默の主人。」Aux heures d'amertume, je m'imagine des boules de saphir, de métal. Je suis maître du silence と述べている。あるいは「大賣出し」Solde においても「無統制のダイヤモンドの投賣り」Solde de diamants sans contrôle! といい、あるいはまた野蠻人 Barbare において「金剛石の風雨を投げかける、その火だ。――ああ世界よ。(人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隱遁や古めかしい情火とは遙かに遠く離れて)」Les feux à la pluie du vent de diamants jetée……O monde!――(Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on entend, qu'on sent.) といつている。ここに東洋人としての私が玄沙の「一顆明珠」をよみとろうとするのは行き過ぎであろうか。かかる此岸における無畏、無求、無心の、無所去、無所從來の、無所住としての嬰孩行は一粒の明珠として象徴さるべきものが感ぜられるのである。一粒の明珠が卽全宇宙であるのである。洋の東西をとわず、時と所とに關せず、宗教人の感じとつたところであるのである。しかも「俺は沈默の主人」といい、さらに「人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隱遁や情火とは遙かに遠く離れて」とわざわざ斷つているところと、今迄展開をあとづけてきたランボオの詩的世界とにてらしてみて、その本質においては、玄沙の「一顆明珠」とへだたるとも、遠からざるものが私には感ぜられるのである。

ランボオはここまで到達した。一顆明珠といつて惡ければ、もはや沈默の主人として、卽宇宙としてのサファイヤの球體、金屬の球體、ダイヤモンドと稱するような世界に到達した。ところがランボオはここに止らなかつた。ランボオはさらに一つの大きな飛躍をとげているように思われるのである。それは「地獄の季節」――「錯亂I」において

――『扨てここに優しい若者があつて、美しい靜かな家に這入つて來るとする、そいつの名前がデュヴァルだらうが、デュフゥルだらうが、アルマンだらうがモウリスだらうが、俺の知つた事ぢやない。ある女が身も心も投げ出してこの根性曲りの馬鹿者を愛して了ふ、やがて女は死んで、今は正に天上の聖女となる。この男がこの女を殺しちまつた様に、お前は俺を殺しちまふだらうよ。これが俺達の定めなのだ、俺達の様な情深い心の定めなのだ……』(傍點筆者) Tu me fera mourir comme il a fait mourir cette femme. C'est notre sort, à nous, coeurs charitables……

あるいは同錯亂Iのこれに少し先立つところで

『……何故つて、俺はいつかは遠い處に行つちまふんだからな。他の奴等だつて行かしてやらなくちやならない、そいつが俺の義務なんだ』Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis il faut que j'en aide d'autres といつているところに「救濟」の思想が現われ

ていることである。あるいはまた「獻身」Dévotion において

『……難破した人々の爲に Pour les naufragés……。母親達と子供達との發熱の爲に Pour la fièvre des mères et des enfants……。世の男達の爲に Pour les hommes……。この極地の混沌よりも尙荒々しい様々な武勇を先立てて、この常闇の國に倣つて口を噤んだ、俺の唯一の祈願の爲に Pour ma seule prière muette comme ces régions de nuit et précédant des bravoures plus violentes que ce chaos polaire……。どんな事があらうと、どんな姿にならうとも、たとひ形而上學の旅にさまよはふとも。——いやその時は猶更の事だ。A tout prix et avec tous les airs, même dans des voyages métaphysiques. —— Mais plus *alors*.』

かく救濟を念じている。難破した世俗の人々の爲に、惡に惱む母親や子供の爲に、教育の不完全な、おしやべり癖のまだぬけぬ世の男達の爲にも、救濟を念じる。且つ宗教體驗には祈りを伴う。しかしその祈りはランボオにおいては彼岸の實在者に對する祈りではない。此岸の「沈默の主人」として、この時、この所を行ずる沈默の祈りである。動いて止まぬ一歩一歩に絕對の現成を見ようとする沈默の祈りである。それには勇氣も必要であろうし、又形而上學の旅にさまよう危險も伴う。なおさら救濟を念ずるわけである。しかもその救濟は「お前は俺を殺しちまふだらうよ。これが俺達の定めなのだ。」というところにその救濟の思想の深さに私はうたれるのである。ここで私は「お前は極樂へ行け、わしは地獄へ眞逆樣」といつた趙州の話を想い起した。これは彼岸的なキリスト教的な救濟には出て來よう筈のない言葉である。この現實の此岸に一元の世界の現成を見ようとするランボオであつて始めて出る言葉ではなかろうか。そしてこの救濟において愛の世界が開けてくる。

「彼こそは再創始された完全な尺度たる、豫見を許さぬ驚くべき理智たる愛でありまた永遠である。」Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveilleuse et imprévue, et l'éternité :「彼は俺達すべてを知つた、俺達すべてを愛した。」Il nous a connus tous et nous a tous aimés :

〔天才〕

もちろんこの愛はキリスト教の愛ではない。既に述べたように「酩酊船以後」において、反キリスト教的、否むしろ超キリスト教的思想は明確にうち出されている。〔「惡胤」「非望」等參照〕

かくてヴォアイアンの眼は「再創始された完全な尺度」であり、「豫見を許さぬ驚くべき理智」（天才）であり、世俗の「全く思ひもよらぬ理論」logique bien imprévue (Guerre) であるが、またそれは「音樂の一樂節の樣に」單純な C'est aussi simple qu'une phrase musicale（同上）ものでもある。單純なものでもあるこのヴォアイアンの眼によつてこそ「全的認識」（書簡、九、參照）が可能となり、「世界言語の時代」（同上參照）の來ることも考えられたのである。ランボオは言葉に對してはほとんど絕望的である。すでに引用したように「言葉なんぞはふつ飛んじまへだ！」（季節が流れる）といい、「時にはあれは聞くも切ない片言の樣な言葉で……」（錯亂I）といつている。知性に基いて、概念を中核とする言葉はランボオの詩的世界に對しては所詮無力である。點をもつて線を復元しようとし、固定的要素をもつて、流れ動くものを復元しようとするに等しいからである。「解らせようにも外道の言葉しか

知らないのだ、ああ、喋るまい」（惡胤）と嘆く所以である。もちろん一方においてランボオの世界においては、語ること自體がもはや無用でもあるわけである。「言葉なんぞはふつ飛んじまへだ！」という一句はその意味であろう。「萬言萬答不如一默」の世界であり、自ら「沈默の主人」と稱する所以である。しかし詩人は本質的に語る人である。外道の言葉をもつてしても語らざるを得ない。禪家が不立文字と稱して語らざるを得なかつたように。そしてそこに語られた世界は言語の世界を超えた世界である。かかる世界の象徴としての言語である。かくて「俺の言葉は神託だ、嘘も僞もない。俺には解つてゐる。」（同上參照）C'est très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans paroles païennes, je voudrais me taire というわけである。かかる世界の象徴としての全的認識の言語が彼のいう世界言語であつたのであろう。最後にかかる世界を見た、いや、かかる世界に住んだランボオが常に西洋を、近代を否定し、東洋に對する強い憧憬をもつていたことに一言ふれておこう。この西洋や近代が知性の傳統のもとにきづき上げられたものであることを考えるとき、今迄たどつてきたランボオの詩的世界からしては、むしろ自明の事といつてよいであろう。「非望」L'impossible の中で「鐚銭同然の分別が又戻つて來て、――何ちよつとの間だ――俺の數々の煩悩は、俺達は西洋に居るのだと早く悟らなかつた事に由來する、と俺は氣付く。西洋の沼々よ。」M'étant retrouvé deux sous de raison,—ça passe vite!—je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident. Les marais occidentaux! また「東洋の終焉この方」depuis la fin de l'Orient ともいつている。西洋は東洋の終焉に始まるものと考えている。そこに人間の一切の煩悩が始まつたわけであり、かくて西洋を默らせねばならず Il faudrait le〔Occident〕faire taire…… 東洋への復歸を願いそれを實現したのである。je retournais à l'Orient et à la sagesse première et éternelle ランボオにとつては東洋は「永遠の、當初の叡智」であつたのである。この「永遠の、當初の叡智」の國が大自然であつたのである。

＊　＊　＊

ランボオは詩筆をなげうつて放浪に入つた。そして再び詩筆をとることをしなかつた。この放浪は單なる放浪癖による放浪や、早期に燃燒しつくした天才のなれの果ての姿とも私にはとれないのである。一八七〇年に始まる數度の出奔、ヴェルレエヌとのいきさつ、そこになるほど一種の放浪癖らしきものを見ることもできよう。あるいはまた「僕はロヨラの最近の俗惡さをあげつらふまい、それに現在、この方面のことに身を入れる元氣はもうないよ」（書簡二三、參照、ドラヘイ宛、一八七五年十月十四日）というこの書簡にまさに燃燒しつくさんとするランボオを見ることも可能であるようにも思われる。

しかしランボオの放浪はこれらの放浪と本質的に異るように思う。それは既に今迄展開のあとをたどつてきたランボオ的世界の必然的歸結としての放浪であつたと思うのである。ランボオは大自然を憧れ求めた。その結果到達した世界は無求の世界であつた。もはや大自然を求める心もなく大自然に融合、合一した。かかる世界は外道の言語としての言語の能力を超える世界であり、言語表現を許さぬ世界であると共に、語る

こと自體を無用とする世界でもあつた。かくてランボオは「外道の言葉」を嘆くと共に、「もう喋るまい」と思い、「言葉なんぞはふつ飛んじまへだ！」と思うわけである。かくして遂にランボオは筆を絶つたのである。ランボオの場合、筆を絶つことは放浪に入ることであつた。道元は修道者であると共に極めて筆まめな、且つ精緻な論理家でもあつた。盤珪は「不生」の一語をもつて凡てをつくそうとした。そこに夫々の個性がある。ほとんど機質的といつてもよい、絶對に個的な世界がある。ランボオの場合筆を絶つ事が放浪であつた、そこにランボオの絶對に個的なランボオ的世界があつたのである。ランボオの場合、筆をたつ事が放浪であつた。それは、ランボオ的世界は無所住の世界であり、風のまにまに、雲のまにまに流れてやまぬ且つ此岸的世界であつたと共に、ランボオは西洋に、フランスに生れて育つた。ここにランボオがアフリカその他に放浪の地を求めた理由もあつたのであろう。決して燃燒しつくしたなれの果ての姿ではなかつたのである、單なる放浪癖でもなかつたのである、と私は解釋する。

Ⅲ　酩酊船註解

以上においてランボオの詩的世界の展開のあとをあらましあとずけてきた。ここでその中間に酩酊船 Bateau ivre をおいて、可能な限りにおいて註解を試みてみたいと思う。この難解な詩が十分にときほぐせるとはさらさら思つていない。上述を根據とする極めて不完全な私案にすぎない。

まず煩をいとわずその全文を飜譯（ランボオ全集）と共にあげておこう。

説明の便宜の爲、各節に番號を附した。

BATEAU IVRE　酩酊船

1 Comme je descendais des Fleuves impassibles,
Je ne me sentis plus guidé par les haleurs :
Des Peaux-Rouges criards les avaient pris pour cibles,
Les ayant cloués nus aux poteaux de couleurs.

非情の大河の溶々たる流れを　下り行きしとき
水先の船曳どもの嚮導も　いつしか覺えず。
赤肌の南蠻鴃舌　船曳を弓矢の標的（マト）に引捕へ、
色鮮かなる亂杙に、赤裸、釘付けに射止めたり。

2 J'étais insoucieux de tous les équipages,
Porteur de blés flamands ou de cotons anglais.
Quand avec mes haleurs ont fini ces tapages,
Les Fleuves m'ont laissé descendre où je voulais.

弗羅曼（フラマン）の小麥を積むか　英吉利（イギリス）の棉花を運ぶ輸送船、
わが乘組の奴原に　心殘りはあらざりけり。
船曳どもの醸（カモ）したる騷擾　今は收まりて、
意（オモヒ）のままの水天に　船は　大河を下りたり。

3 Dans les clapotements furieux des marées,
Moi, l'autre hiver, plus sourd que les cerveaux d'enfants,
Je courus! Et les Péninsules démarées
N'ont pas subi tohu-bohus plus triomphants.

潮騒の哮り狂へる高鳴りの眞中を、霙の
冬なりき、幼き兒らの腦髓より　なほ耳鈍く、
馳驅したり。纜解かれし半島も、これに勝りて
誇らしき大混亂に陷りしため無かりき。

4 La tempête bénit mes éveils maritimes.
Plus léger qu'un bouchon j'ai dansé sur les flots
Qu'on appelle rouleurs éternels de victimes,
Dix nuits, sans regretter l'œil niais des falots!

その時　暴風は　海上のわが覺醒に祝福を浴せかけたり。
永劫に犧牲を轉々するといふ　波濤の上に
コルクの栓よりなほ輕く　身を躍らせて、
夜は十夜　港の燈火の阿呆なる眼つきも悔いず。

5 Plus douce qu'aux enfants la chair des pommes sures,
L'eau verte pénétra ma coque de sapin
Et des taches de vins bleus et des vomissures
Me lava, dispersant gouvernail et grappin.

爽かに酸き林檎より　子供らにとりては甘き
綠なる海水は　わが樅材の舟體に滲み入り、
色靑き葡萄酒の汚染、嘔吐の汚穢を
洗ひ淨めて、舵も失せたり、錨も失せたり。

6 Et dès lors, je me suis baigné dans le Poème
De la Mer, infusé d'astres, et lactescent,
Dévorant les azurs verts; où, flottaison blême

Et ravie, un noyé pensif, parfois, descend;

この日より、星の光に注がれて、乳色に光り輝き、
碧瑠璃の空を啖ひて、大海の詩のただ中に
浸りたり。その大海に、流れ行く、恍惚として
蒼ざめし吃水線の　水死人　時をり思ひに沈みつつ。

7 Où, teignant tout à coup les bleuités, délires
Et rhythmes lents sous les rutilements du jour,
Plus fortes que l'alcool, plus vastes que vos lyres,
Fermentent les rousseurs amères de l'amour!

その大海に、忽焉と波の群靑を色に染め、
金紅燦たる日の下の　錯亂か　緩るき韻律か、
アルコホルより强烈に、ながが竪琴より壯大に、
愛欲の苦き朱の痣　滾々として醱酵す。

8 Je sais les cieux crevant en éclairs, et les trombes
Et les ressacs et les courants: je sais le soir,
L'Aube exaltée ainsi qu'un peuple de colombes,
Et j'ai vu quelquefois ce que l'homme a cru voir.

電光に裂けたる空を、龍卷を、寄せては返す
海嘯を　はた潮流を　われは知る。また夕暮を、
一群の鳩をさながら　歡喜に滿てる曙を　われは知る。
また人間の見しと思ひし物相を　時をりは眞に見たり。

9 J'ai vu le soleil bas, taché d'horreurs mystiques,
Illuminant de longs figements violets,

Pareils à des acteurs de drames très antiques
Les flots roulant au loin leurs frisson de volets !

神秘なる恐怖の色に染まりたる　低き落日
紫の長き凝固を　色彩(イロド)りて耀(カガヨ)ふ様を、
古代の劇の俳優の姿に似たる沖津波
鎧扉(ヨロヒド)漏るる明暗の襞(ヒダ)の顫へを轉ばすを　われは見たり。

10 J'ai rêvé la nuit verte aux neiges éblouies,
Baiser montant aux yeux des mers avec lenteurs,
La circulation des sèves inouïes,
Et l'éveil jaune et bleu des phosphores chanteurs !

ゆくらゆくらに昇り來て　海の瞳(ヒトミ)に接吻(クチヅ)くる、
燦々と眩(マブ)き雪の　緑の夜を、
未聞の生氣潑剌と循環するを、はた　歌を
唄ふ燐光　黄に青に眼醒むるさまを、われ夢みたり。

11 J'ai suivi, des mois pleins, pareille aux vacheries
Hystériques, la houle à l'assaut des récifs,
Sans songer que les pieds lumineux des Maries
Pussent forcer le mufle aux Océans poussifs !

幾月また幾月も、ヒステリイの激情に似し
大浪の　暗礁に襲ひかかるに隨ひ行きて、
愚かやわれは知らざりき、マリヤの如き輝ける
尊き御足　息も喘(アヘ)げる大洋の面を寝ひて靜め得んとは。

12 J'ai heurté, savez-vous, d'incroyables Florides
Mêlant aux fleurs des yeux de panthères aux peaux
D'hommes ! Des arcs-en-ciel tendus comme des brides
Sous l'horizon des mers, à de glauques troupeaux.

君知るや、世に不思議なるフロリダに船は衝突(アタ)りぬ、
人間の皮膚(ハダヘ)の豹の眼の光　叢(ムラ)なす花に
入り亂れ、手綱の如く張り渡す七彩(ナナイロ)の虹、
水天のさかひの下に、紺青の羊の群を率ゐたり。

13 J'ai vu fermenter les marais énormes, nasses
Où pourrit dans les joncs tout un Léviathan !
Des écroulements d'eaux au milieu des bonaces,
Et les lointains vers les gouffres cataractant !

巨大なる沼、沸(ワ)き滾(タギ)るを　われ見たり、燈心草の
生ひ繁る中に怪獸レヴィアタンの腐爛せし魚簗(ヤナ)。
また　大凪(オホナギ)の唯中に　水　忽然と崩壊し、
深淵に向ひて　瀧と落下する　遙かなる景色を見たり。

14 Glaciers, soleils d'argent, flots nacreux, cieux de braises,
Échouages hideux au fond des golfes bruns
Où les serpents géants dévorés des punaises
Choient, des arbres tordus, avec de noirs parfums !

氷河や、銀の太陽や、螺鈿の波や、火の空や、
褐色の入江の奥に　坐礁せる醜き船や
その舟に、南京虫に喰はれたる大蛇蟒蛇(ダイジャウハバミ)
黑き臭氣を放ちつつ　捩れし樹より　墜落す。

15 J'aurais voulu montrer aux enfants ces dorades

Du flot bleu, ces poissons d'or, ces poissons chantants.
——Des écumes de fleurs ont bercé mes dérades
Et d'ineffables vents m'ont ailé par instants.

をさな児に見せばや見せむ　紺碧の波間に遊ぶ
櫻鯛、黄金の魚や、歌唄ふ魚。
——花と散る泡沫(ミナワ)は　舟の漂流をやさしく揺(ユス)り、
言ふに言はれぬ微風(ソヨカゼ)は　時をりわれに翼をかしぬ。

16 Parfois, martyr lassé des pôles et des zones,
La mer dont le sanglot faisait mon roulis doux
Montait vers moi ses fleurs d'ombre aux ventouses jaunes
Et je restais, ainsi qu'une femme à genoux……

また或る時は、兩極と地帶の旅に倦き果てし
殉教者、わが心地よき横揺れを　海の嗚咽(フエツ)はゆさぶりて
黄の吸角(ヘビダマ)ある影の花を　海　わが方に挿頭(カザ)したり。
われはそのまま坐し居たり、女性の跪坐(ヒザマヅ)けるごと……

17 Presque île, ballottant sur mes bords les querelles
Et les fientes d'oiseaux clabaudeurs aux yeux blonds.
Et je voguais, lorsqu'à travers mes liens frêles
Des noyés descendaient dormir, à reculons！……

宛然(サナガラ)　島のごとくなり　さはれこの島　舷(フナベリ)に　聲甲高き
金色の眼の群島(ムラドリ)の喧噪と糞とを　輕く揺りたり。
なほ漂(タダヨ)うてゆくほどに、わが細索(ホソヅナ)を横切りて、
逆に流れて　水死人　眠りに落ちゆくものありき……

18 Or moi, bateau perdu sous les cheveux des anses,
Jeté par l'ouragan dans l'éther sans oiseau,
Moi dont les Monitors et les voiliers des Hanses
N'auraient pas repêché la carcasse ivre d'eau；

さて　われは　颶風(ハヤテ)によりて　鳥飛ばぬ虚空の中に
投げられて、入江の髪の藻の下に　難破せる舟、
よしや　海防艦なりと　ハンザの帆前船なりと、
水に浸りて醉ひしれしこの形骸を　いかで拾はむ。

19 Libre, fumant, monté de brumes violettes,
Moi qui trouais le ciel rougeoyant comme un mur
Qui porte, confiture exquise aux bons poètes,
Des lichens de soleil et des morves d'azur；

思ひのままにのびのびと、煙を吐きて、紫の靄を乘せて、
赤味を帶びたる大空を　壁の如くに　刳(ク)り拔きし舟、
積みたるは、太陽の蘚苔(コケ)　蒼空の鼻汁(ハナ)、
世の中の詩人の輩(ヤカラ)に、至上の美味の砂糖菓子。

20 Qui courais, taché de lunules électriques,
Planche folle, escorté des hippocampes noirs,
Quand les juillets faisaient crouler à coups de triques
Les cieux ultramarins aux ardents entonnoirs；

火花を散らす衛星の光を浴びて驅りし　われ、
黒き海馬に護衛され、踊り狂へる板子の船。
折しもあれや、七月は　燃ゆる漏斗の碧瑠璃の

空を　忽ち楗棒の亂打に　崩壞し了んぬ。

21 Moi qui tremblais, sentant geindre à cinquante lieues
Le rut des Béhémots et des Maelstroms épais,
Fileur éternel des immobilités bleues,
Je regrette l'Europe aux anciens parapets!

五十里の彼方に　ベヘモの發情と　轟々たるマルストロムの
渦卷と　呻く氣配を感じては　戰き顫へしわれながら、
碧き不動の大海より　永劫に浪を紡ぐ　われ、
昔ながら胸壁に圍まれし歐羅巴の　懷しきかな。

22 J'ai vu des archipels sidéraux! et des îles
Dont les cieux délirants sont ouverts au vogueur:
—Est-ce en ces nuits sans fond que tu dors et t'exiles,
Million d'oiseaux d'or, ô future Vigueur?—

われは星座の群島を、島嶼(シマジマ)の無數を　みたり。
その錯亂せる天空は　この漂泊人(タビビト)に開かれたり。
底無しのかかる夜な夜な　汝は　眠りて流浪すや、
おお、百萬の金色の鳥よ、未來を創造(ツク)る生氣よ——

23 Mais, vrai, j'ai trop pleuré! Les Aubes sont navrantes.
Toute lune est atroce et tout soleil amer:
L'âcre amour m'a gonflé de torpeurs enivrantes.
O que ma quille éclate! O que j'aille à la mer!

されど、げに、餘りにわれは泣きたりき。あけぼのは
胸を抉りて痛し。月　なべて無慙に、日は　なべて苦(ニガ)し。
苛酷の戀は　醉ひ痴れし痲痺に　心を滿たしたり。
おお、龍骨よ　破裂せよ。おお　海底にわれを沈めよ。

24 Si je désire une eau d'Europe, c'est la flache
Noire et froide où vers le crépuscule embaumé
Un enfant accroupi plein de tristesses, lâche
Un bateau frêle comme un papillon de mai.

もしわれにして歐羅巴の、今なほ、水を望むとせば、
そは　冷かなる黝(グロ)き隱沼、風薰る夕暮どきに、
悲しみの溢るる童子　蹲踞(ウヅクマ)りて、五月の蝶を
さながら木葉の小舟を放ちやる　森の水沼(ミヌマ)。

25 Je ne puis plus, baigné de vos langueurs, ô lames,
Enlever leur sillage aux porteurs de cotons,
Ni traverser l'orgueil des drapeaux et des flammes,
Ni nager sous les yeux horribles des pontons.

噫、波よ、ひとたび汝の倦怠を浴びたるわれは、
棉花積む舟の曳く水尾を追ふ流離(サスラヒ)も、
旌旗(ヘタ)と焰の驕慢の眞中(サナカ)を貫く彷徨も、
はた船橋の恐しき眼を搔潜る漂流も、終ひに叶はずなり果てたり矣。

註解

(1) Bateau ivre——
この非情の大河を下りゆく舟は陶醉の舟である。この「酩酊船」は日

常的、世俗的二元對立の世界から解放せられて一元的無畏奔放の世界にただよう舟である。棹さすこともなく、舵をとることもなく、浪のまにまにただよう無所住の舟である。この無畏無所住の世界は陶醉をもつて形容することは極めて自然であり、かかる表現をした人にかつて、日本の道元がある。「醉酒の時節にたまをあたふる親友あり、親友にはかならずたまをあたふべし、たまをかけらるる時節、かならず醉酒するなり、既是恁麼は盡十方界にてある一顆明珠なり。」（正法眼藏—一顆明珠參照）一顆明珠が盡十方界であるこの境地を醉酒の時といつている。

ランボオは「酩酊船」以後において、以前には見られなかつた（あるいは不明確であつた）、新しい（あるいは確固たる）展開はするが、前後を通じて、二元對立の世界を否定して一元の世界に到ろうとする、しかもキリスト教的でない世界に至ろうとする傾向は一致して認められた。そしてかかる世界を醉酒をもつて表現しようとする傾向も前後を通じて一致している。（前、「夕の祈禱」「ジャンヌ・マリーの手」——（ああ聖なる手よ、僕たちの醒めることなき陶醉の脣がそこに顫へる手よ）參照）（後、「一番高い塔の歌」—（時よ來い、ああ陶醉の時よ來い））「カシスの川」「渇の喜劇」その他參照、但し後期においては醉酒が、彼岸的でなく、此岸的傾向を強くおびてきていることは當然であろう。「渇の喜劇」三、參照）

しかもこの醉酒の舟は「非情の大河」を下り漂う。ここにすでにこの詩の世界が象徴せられているものと考えてよい。

des Fleuves impassibles——

ランボオには前後を通じて海、水の流れ、に對する憧れが強い。憧れが強いという表現は誤解を招くかもしれない。東洋においても行雲流水と言つた様に、ランボオ的世界を象徴するに最もふさわしいものであつたのである。現實の海、流れには、底もあれば、兩岸もある。しかしとかく海や水の流れは底があることを忘れしめ、岸のあることを忘れしめる。漂泊解放の感が強い。だから「俺は海を愛した、この身の穢れを洗つてくれるものがあつたなら、海だつたに相違ない」（後、「錯亂Ⅱ」參照）「おお摩訶不思議な海の波よ、O flots abracadabrantesques 僕の心臟を手にとつて、どうか洗ひ淨めてくれ！」（前、「盜まれた心臟」參照）という。

また二元對立の世界からの解放出奔に對して、「下界に高まる巷のざわめきをよそに……はげしく帆布を豫感してゐたのだ」（「七歳の詩人達」參照）ともいつている。出帆をもつて象徴している。水と舟とをもつて象徴しようとする。

では impassibles とはどういう意味であろうか。これはランボオの世界の核心にふれる重要な言葉である。河は有情でなく非情のものではある。しかしランボオは恐らくそのような意味では言つているのではなかろう。この Fleuves impassibles はランボオ的世界そのものである。主客の對立を超えた一元の世界、對立がそのまま融通無碍である一元の世界、流れてやまぬ無所住の世界、無心の世界である。それは有情、非情を超えた非情の世界である。あるがままの世界に安住しようとする、そこに世俗界から見れば非情といつてよい一面が出てくる。芭蕉は拾子に「汝の運命のつたなきを泣け」と言つた。この非情に芭蕉の眞髓をのぞかせている。ランボオの下る大河は一切合切否定しつくして、しかもあるがままに「運命の車」（「忍耐の祭」參照）にのつて流れようとする大河

である。かかる大河は非情の大河である。

Je ne me sentis plus guidé par les haleurs :——

かかる非情の大河を流れのままに、醉酒の中に、この舟は下つて行く。かかる船はもはや haleurs に曳かれる舟ではない。もしひかれるならばそれは流れのままではない。いわばそこに我執があるわけである。何物にも曳かれることなく、後に出てくるように舵もなく、錨もなく、浪のまにまに漂い流れ行く舟である。これがランボオの世界の一面、出發點であつた。そこに絶對の安らぎがあつた。

Des Poteaux-Rouges criards les avaient pris pour cibles,…——

赤肌の南蠻鴃舌とは太古の大自然を象徴するもの。知性を否定し文化を否定し、西洋を嫌惡したランボオは、けものの至福を羨み（錯亂Ⅱ）太古の大自然に已の世界を求めた。非情の大河を下る酩酊船はまた赤肌の南蠻鴃舌の國をめざす舟でもあつた。かつてはランボオを知性と社會の枠の中にしばりつけ、煩惱の根源であつた haleurs も、今や、釘附けに射止められて、もはや酩酊船の自由な漂流を妨げることをしない。

(2) Quand avec mes haleurs ont fini ces tapages,

煩惱のきづなは絶たれた。浪のまにまに漂う醉酒の舟を妨げる船曳の騒擾も今は收まつた。かくてLes Fleuves m'ont laissé descendre où je voulais である。この舟がフラマンの小麥をつむ舟であつても、イギリスの棉花を運ぶ輸送船であつてもよい。今や乗組員に煩わされることもない。(insoucieux)

(3) Dans les clapotements furieux des marées, / Moi, l'autre hiver, plus sourd que les cerveaux d'enfants, / Je courus!——

ここは「ランボオ全集」脚註に「革命の世界」「一八七一年二月か」とあるに從いたい。一八七〇—一八七一年のフランスは普佛戰爭、革命、暴動、動亂の時代である。かかる動亂はすべてこの世のもの、世俗界の動亂である。早くからヴォアイアンの素質をもつていた天才兒ランボオは、かかる動亂をおよそ無意味と見た。無意味な世界に對して「幼兒の腦髓よりなほ耳鈍く」この中を過した。それは一應 clapotements furieux であつたかもしれない。

Et les Péninsules démarrées / N'ont pas subi tohu-bohus plus triomphants——

clapotement furieux であつたかもしれないがそれは所詮二元對立の世俗界内でのことである。ランボオの否定行は大般若の否定を想わせるほど絶望的且つ歡喜に滿ちた否定行であつた。二元對立の世界を根こそぎ、一切合切を否定しつくしてやまない。だとすれば今や酩酊船が纜を解いたこの半島 Péninsules démarées——これは直接にはヨーロッパ、西洋を指すのであろう。さらには文化一般をさすものと見てもよい——の動亂はたかが知れたものである。ランボオの否定行に伴う動亂は何物もこれに勝ることのない誇らしい動亂である。tohu-bohus triomphants である。

(4) La tempête——

この暴風(アラシ)は前の tohu-bohus triomphants をうける。否定の暴風をへて覺醒がくる。僞の世界は一切崩れ落ちて、絶對眞實の世界にめざめて、今、浪のまにまに漂つているéveils maritimes 。その覺醒を暴風が祝福する。その漂泊は、コルクよりもなお輕い。停滯執着のない無所住の世界だからである。「惡亂」において「俺の生活は一體目方がかから

ない」といい「心もかるく身もかるく」si gai, si facile（忍耐の祭、四、黄金時代）といつている事を想い起す。

rouleurs éternels de victimes——

ここでは victimes が問題である。この victimes は後に出てくる水死人 noyé と相通ずるものをもつている。水死人についてはその條で説明を加えたいと思うので、今は結論のみを述べれば、消え去つて行くかつての「煩惱」をさすものと考えられる。日常世俗の世界、知性文化の世界、そこに根ざす一切の煩惱、今はそれも波に「洗ひ淨め」られて（錯亂Ⅱ參照）消え去つて行く。この海は淸濁併せて一切をのみつくしてしまう。永遠にのみつくす。本來、一切衆生悉有佛性であるが、ここでは消え去つて行くかつての「煩惱」としての水死人を犠牲と稱しているのである。海に一切の煩惱が運ばれて、身も輕々と、コルクよりも輕く波の上をおどる。

sans regretter l'œil niais des falots——

港の燈火——ヨーロッパ、日常的世俗的世界——より見れば浪のまにまに漂う酩酊船は狂人にも等しく見えるかもしれないが、逆に「絶對」の流れのまにまに漂う酩酊船から見れば港の燈火は正に馬鹿々々しくも見えることであろう。今は絶對の安らぎの中に漂うて悔いることもない。

(5)　Plus douce qu'aux enfants la chair des pommes sures——

à l'état sauvage といわれたランボオは又前、後を通じて子供には關心をよせている。（前、「太陽と肉體」一、「びつくりした子供たち」。後、「陶醉の午前」——前代未聞の作品と素晴らしい肉體とを、さあ歡呼して初めて迎へよう。これは子供達の笑ひで始まつたが、又彼等の笑ひで終るだらう。——等參照）それはランボオの世界が一種の嬰孩行であることに基く。この綠の水は、この子供達には林檎よりも甘い。綠の水とは爽かさ、安らぎの水の意味である。（綠については(6)參照）

L'eau verte pénétra ma coque de sapin——

この綠の水は船體に滲透する。舟は醉酒の舟であり、綠の水は流れてやまぬ、淸濁併せて一切をのみつくす、一切の根源なる綠の水である。舟の外に水なく、水の中に舟はない。水は舟であり、舟は水である。酩酊船の透脱とでもいうべきであろうか。

Et des taches de......Me lava, dispersant gouvernail et grappin.——

さきにも述べたように、この醉酒の舟に一切の我執、はからいはない。舵もなく錨もなくてこそ、絶對の海に波のまにまに漂うことができ、そこにこそ眞の安らぎがある。この絶對の安らぎの國はまた同時に淸淨無垢の世界でもある。この綠の水は色靑き文化の汚染（シミ）も、世俗にもよおす嘔吐の汚穢も一切を「洗ひ淨め」（「盜まれた心臓」「錯亂Ⅱ」參照）てくれる。無所住の世界は淸淨の國である。dispersant gouvernail et grappin とは、この酩酊船には一切の我執、束縛、定着がなく、流れのままに漂うことを意味する。脚註にあるように「革命に難破して漂流する」の意味ではないと思う。二元對立の世俗界を一切否定して無所住の世界に漂うのである。

(6)　Et dès lors, je me suis baigné dans le Poème/De la Mer——

淸淨無垢の無所住の世界こそランボオにとつては詩の國であつた。この後で「世の中の詩人の聾に至上の美味の砂糖菓子」Confiture exquise

aux bons poètes というように、あるいはドウムニー宛の書簡の中で「詩はもはや行動を韻律化するものでなく、詩は先驅するもの」（書簡九、參照）といっているように、この根源的絶對の世界こそ詩の世界であつて、單に對象界の描寫に詩があるのではなかつた。かくてこの海こそ詩であり、酩酊船は自ら透脱して、一體的にその海に溺（ヒタ）る。この詩の海は星の光にそそがれ乳色に光り輝く。古來多く宗教人の語るようにかかる世界はまた光り輝く世界でもある。

Dévorant les azurs verts——

碧瑠璃の空を啖うとは、無求の世界の象徴であろう。ランボオの世界は無求の世界であつた。「畑に俺が摘むものは野萵苣（ヂシャ）に菫だ」（飢餓の祭）、「垣根の蜘蛛めの食ふものはただ紫の菫草」（食事にとつた飼鳥の）を想い起させる。

前に l'eau verte といい、今、Les azurs verts という。ランボオの色彩感情は人の意表に出るやに思われがちであるが、「母音」を始めとして全詩篇にちりばめられた色彩を綜合點檢すれば、決して人の意表に出るものではない。むしろ公約數的な色彩感情であつたといつてよい位である。この vert にはかなり意味があるやに思われる。「母音」を引用しておこう。

…U vert,…

U, cycles, vibrements divins des mers virides,

Paix des pâtis semés d'animaux, paix des rides

Que l'alchimie imprime aux grands fronts studieux ;

緑に、靜かな神々しい「搖蕩（ユラギ）」、牧場の「平和（ノドケサ）」學究の額の平和（シズケサ）を感じとつている。その他においても大體、安らぎ、爽かさを感じとつている。この碧瑠璃の空も安らぎを與える空である。透脱した酩酊船には絶對の安らぎがある。

flottaison blême et ravie——

だからその吃水線は色蒼ざめて海と舟とが融合の狀態にあり、安らぎの中に恍惚としている。無求、忘我の境である。

un noyé pensif, parfois, descend ;——

noyé とは何か。全集の脚註にあるように「自己の酩酊船」ととることも可能かもしれないが、私は前述のように消え去つて行く、かつての「煩惱」の意味にとりたい。その理由は「別れ」において「俺も今は勝利はわがものと言ひ切れる。齒嚙みも火の叫びも臭い溜息も鎭まり、不潔な追憶はみんな消え去る。俺の最後の未練は逃げる、——言はば乞食、盜賊、死の友、あらゆる落伍者の群への嫉妬だが——復讐成つた以上は亡者共だ。」Mes derniers regrets détalent——……——Damnés, si je me vengeais! といつている。ランボオにおいて今は勝利はわがものとなつた。絶對の安らぎをわがものとした。いや一步一步に絶對を行じて行く。そこには「不潔な追憶」はみな消え去り、「最後の未練」も逃げた。人間ランボオには「不潔な追憶」のよみがえる事もあつたのであろう。「最後の未練」を斷ちきれず懊惱する事もあつたであろう。しかし今や勝利を得て、これらはすべて消え失せた。「復讐が成つた」のだ。「復讐の成つた」今においてはこれらの煩惱は Damnés 地獄の亡者である。

「Being Beauteous」において「……これらの效果に氣の狂つた味ひは、

俺達の遙か背後から、俺達の美の母親めがけてこの世が投げる、死人の喘ぎと嗄れた音樂の音に充塡されるが、——」 la saveur forcenée de ces effets se chargeant avec les sifflements mortels et les rauques musiques que le monde, loin derrière nous, lance sur notre mère de beauté,——……

といつている。「雪を前にした丈の高い『美』の一『存在』、俺達の美の母親に對してこの世 le monde がなげつけるものは sifflements mortels と嗄れた音樂である。ここにもこの煩惱の世界は、それを超越した「美の母親」に對しては死を以て象徵されている。「街」において「……自分を識らうとする要求をもたぬこの幾百萬の人々は、すべて一列一體、教育を職業を、老齡を曳摺つて行く。……それは恰も俺の窓越しに、石炭の厚い永久に消えぬ煙を貫いて轉々ところがつて行く、新しい亡靈共を見るやうだ。」Aussi comme, de ma fenêtre, je vois des spectres nouveaux roulant à travers l'épaisse et éternelle fumée de charbon.

といつている。「片眼の知性」によつてではなく「自己を全的に認識する」ことによつて、絶對の世界が開かれるのだが（書簡、九）「近代首府の市民」はこの要求をもたぬ。この要求をもたぬ限り、煩惱を脫することはできない。それはやはりランボオにとつては轉り行く spectres nouveaux と見えた。ここでも下界の煩惱が亡靈、死をもつて象徵されている。

「惡亂」において「俺は死人達を腹の中に埋葬した」J'ensevelis les morts dans mon ventre.

といつている。ここでも、絶對に對する、二元對立の世界、煩惱を「死人」と稱している。

かくして、以上の諸例からしてランボオが絶對に對して二元對立の世界、煩惱を「死」に關係のある言葉をもつて象徵していた事が知られる。それは一元の絶對の世界が具體的な生命をもつて流れ動く世界であるのに對して、二元對立の世界は分斷固定された世界であることによるものであろう。そこで、この場合も noyé はやはり世俗界の煩惱を象徵するものと解したいのである。第十七節にもう一度「水死人」が出てくる。ここもその意味に解釋することが可能であるのみならず、その意味がさらに一層明確になる。（第十七節參照）

さて、今や酩酊船は透脫して、海と一體的に融合して、無求、忘我の世界を漂う。時折腦裏によみがえる煩惱も今は海の中にのまれて消えて行く。pensif とは煩惱に思いなやむ姿であろう。

(7) Où, teignant tout à coup les bleuités,——

煩惱は去つて無求、忘我の境に漂う酩酊船の透脫、それは bleuité をもつてあらわすにふさわしい安らかさの世界であつた。しかしランボオの世界は彼岸的な靜寂だけではない。この靜寂、安らかさの反面には、常に「兇暴」なといつてもよい一切合切の否定行が伴う。teignant……sous rutilement du jour, はこの靜寂、安らかさの反面に常に伴う熱情的な否定行を色彩的に象徵するものと考えられる。ランボオにおいて赤系統の色彩は動的なはげしさ、熱情的なるものの象徵に使われている。(rutilant——Qui est d'un rouge éclatant)「母音」の例をあげておこう。

……I rouge……
I, pourpres, sang craché, rire des lèvres belles
Dans la colère ou les ivresses pénitentes;

その他「俺の心よ血と煥の」において

Qu'es-ce pour nous, mon coeur, que les nappes de sang
Et de braise, et mille meurtres, et les longs cris
De rage, sanglots de tout enfer renversant
Tout ordre;……

俺の心よ、血と煥の、眞赤な水脈と大虐殺、長く尾を曳く憤怒の叫喚、秩序は一切くつがへす
地獄の底のすすりなき、それが一體何だつて？

といつている。かかる熱情的な否定行のはげしさをさすものとみてよいであろう。

その les rousseurs amères de l'amour をかもすものは錯亂と rhythmes lents である。錯亂はいうまでもなく、「地獄の季節」に出てくるように、二元的世界から見た錯亂であり、二元的世界の否定轉換を意味する。その否定轉換を媒介として一元の世界が現出する。その世界は「廣大無邊」（「天才」、「惡胤」）であり、邊際のない世界の律(リトム)はゆたかに大きい。rhythmes lents とはかかる無邊際界の律をさすのであろう。この錯亂、そして緩るき韻律が「愛の苦き朱痣」をかもすのである。

les rousseurs de l'amour——

ここを鈴木教授は「愛慾の苦き朱の痣」と譯し、小林秀雄氏は「愛執の苦き赤痣」と譯しておられる。しかしこの amour は私には愛欲ではもちろんなく、愛執でもないと思われる。これは、「愛の苦き朱痣」と譯しておきたい。二元的世界の否定、轉換、廣大無邊の世界のゆたかな律のかもすものは愛でなければならない。愛の苦き朱痣とは、「最も純粋な愛」」至福の醱酵を意味する。「陶醉の午前」において

「俺達の最も純粋な愛 notre très pur amour を釀し出す爲に、善惡の樹を暗闇の中に埋葬し、暴君的な誠實を流刑に處する事を俺達は約束されたのだ。」

といつている。そこには苦さ(ニガ)を伴う。

(8) Je sais les cieux crevant en éclairs,……——

「電光にさけたる空」、「龍卷」、「寄せては返す海嘯」とはこの熱情的な、兇暴な否定行の象徴であろう。「俺の心よ、血と煥の」の一節に

火山は跳び上り！ 海は湧き……

とその否定行を描いている。「夕暮」「一群の鳩をさながら歡喜に滿てる曙」とは、その否定のはてに現出する安らぎの、眞の幸福の象徴であろう。

「太陽と肉體」の一節に

おお勝ち誇る曉の光、愛の一陽來福

といつている。その曙であろう。夕暮については(9)參照。

j'ai vu quelquefois ce que l'homme a cru voir——

l'homme a cru voir に對して j'ai vu quelquefois である。「眞に見たり」と譯されている通りである。脚註にある通りこれはヴァイアンの世界であろう。それは空想や觀念ではないからである。

(9) J'ai vu le soleil bas, taché d'horreurs mystiques——

落日は⑽の綠の夜の先驅。

全集脚註にあるように「紫の長き凝固」にはボオドレエルの「夕の諧調」が影響しているのであろう。「紫の長き凝固をいろどりて耀ふ落日」はあたかも佛典における佛國淨土の描寫を想わせるものがある。(8)の龍卷や海嘯に比して夕の靜けさを示す。しかしその落日は神秘なる恐怖の色に染まつた落日である。「神秘なる恐怖」はランボオが方々で言つている「未知の國」（書簡、九）「宗教の神秘」（地獄の夜）と關係がある。その落日はいわば「佛國淨土」の光に輝いている落日である。卽ちこの未知の國、神秘の國の光に染まつているという意味で taché d'horreurs mystiques といつたのであろう。恐怖はその「未知の國、」「宗教の神秘」のもつ恐怖である。

Pareils à des acteurs de drames très antiques,
Les flots roulant au loin frissons de volets——

この二行は「岬」において「金色の曙に、また顫へるやうな夕暮に……」L'aube d'or et la soirée frissonnante といつている言葉や、「古代の使節の歸還を迎へて輝く幾條の神殿（ファノム）」という言葉や、また「青年時」四における「お前の身の廻りには古代の群集や無爲の榮耀に對する好奇心が夢の樣に溢れるだらう。」……la curiosité d'anciennes foules et de luxes oisifs といつている言葉が想い起される。

ランボオが古代に對して、近代、ヨーロッパに見られない、彼の大自然を見た事はすでにしばしば述べたので（I、II參照）ここに改めて言うまでもないであろう。La soirée frissonnante については、ランボオが絕對の世界を「音樂の家」にたとえているところから說明のつく言葉である。たとえば「斷章」において「私達の朗らかな交感にとつて、一つの音樂の家となる時に、……」……en une maison musicale pour notre claire sympathie といつているように、あるいはまた、「放浪者」において「俺は類稀なる音樂の樂隊に貫かれた平野の彼方に、夜の未來の榮耀の幻を創造してゐたのだ。」Je créais, par delà la campagne traversée par des bandes de musique rare, les fantômes du futur luxe nocturne といつているように。

そこで Pareils à des acteurs de drames très antiques,/Les flots roulant au loin frissons de volets の二句は明かにランボオの「絕對の世界」を意味するわけである。

かくて(9)の j'ai vu は(8) j'ai vu と同じく絕對の世界を見たのである。

⑽ J'ai rêvé la nuit verte aux neiges éblouies,——

「綠の夜」と「眩き雪」、これはやすらかさ、靜けさ、あどけなさ、卽ちランボオの安らぎの象徵である。ここでもランボオの色彩感情が問題となる。綠についてはすでに述べた。「綠の夜」は安らかな夜、爽かな夜を意味する。もちろんそれは絕對の安らぎとしての爽やかさ、安らかさである。

「眩き雪」においては白が問題となる。まず「母音」を例としよう。

……E blanc,……

E, candeurs des vapeurs et des tentes,
Lances des glaciers fiers, rois blancs, frissons d'ombelles;

白に對しては、あどけなさ、きびしさ、おののきが出てくる。neiges

éblouies はかくてそれらの象徴となる。

かくて夢みた「燦々と眩き雪の綠の夜」とは、あどけなくも、また生氣あふるるきびしさをもつた爽かな絶對の安らぎを意味する。

恐怖の色に染まつた落日も夜となつて、そこに安らぎ無畏の世界が展開する。

Baisers montant aux yeux des mers avec lenteurs,——

海の瞳に接吻はいうまでもなく、海との合一融合、それによる安らぎである。「太陽と肉體」における「人間は幼兒のやうにその膝の上でじやれ遊びつつ、嬉しさうにめでたい乳房をしやぶつてゐたものだ。」と相通ずるものを感ぜしめる。

La circulations des sèves inouies.——

これはほとんど説明を要しない。この絶對の安らぎ、無畏の世界こそ生命をもつて生成流動する世界である。しかしこの生命は二元對立の世界から見れば、それは未聞のものである。

Et l'éveil jaune et bleu des phosphores chanteurs.——

この黄と青とは燐光の色をさす事いうまでもないが、問題は黄にある。しかし黄については、(16)「黄の吸角」の條に説明を譲つてここでは結論だけに止めよう。黄はランボオにおいてはやはり沈靜、安らぎの感情を伴つている。

歌をうたう燐光、それは直接には燐の燃える焔のゆらめきであるが、それは生成流動する根源の世界、詩の根源をさす。（(19)參照）「行動の韻律化」ではなく「先驅するもの」（書簡、九）としての詩の世界をさす。

かくて根源的絶對の世界にこそ眞の安らぎがあり、詩がある事に對する覺醒をさすものと考えてよいであろう。

(11)あどけなくも、また生氣あふるる、きびしさをもつた絶對の安らぎ、かかる根源的絶對の世界にこそ詩がある事に對するめざめをうたつた前節をうけ、さらにかかる世界をも、もう一度否定して、(12)以下に示される「世に不思議なるフロリダ」の世界が展開せられるのである。(11)はその中間にあつて、「世に不思議なるフロリダ」の世界に想い至らなかつた自己の愚かさをうたつているのである。

J'ai suivi……la houle à l'assaut des récifs,——

とは(10)までの世界に到達するための兇暴にも似た一切の否定行をさすわけである。暗礁とはかかる世界の展開を妨げる一切の知性、倫理、世俗界をさすのである。そのはげしさはヒステリーの激情にも似ていたわけである。

Sans songer que les pieds lumineux des Maries / Pussent forcer le mufle aux Océans poussifs,——

les pieds lumineux des Maries とは(12)以下の世界、それを神の足として象徴したわけである。

Océans poussifs——

一切の否定行のはげしさに息も喘げる大洋である。

Sans songer que——

とは(12)以下に示される「世にも不思議なるフロリダ」の世界に想い至らなかつた自己の愚かさをいつているわけである。「愚かや」と譯されているが、ここには正にかかる感情がこめられている。

(12) J'ai heurté, savez-vous, d'incroyables Florides

本(12)節以下(13)(14)の三節は incroyables Florides に關するものである。ランボオにおいては、一切の否定、徹底した否定が先立つ。しかしその否定は肯定に轉換されて、否定即肯定の世界に到達する。否定を媒介とした現實の大肯定に到達している。現實の世界は二元對立の煩惱の世界であり、また、醜怪、束縛、停滯、愚劣の世界である。しかしランボオの現實肯定は、直接的肯定ではない。一切の否定を媒介としている。そこに、この醜怪、束縛、停滯、愚劣の世界が即絶對の世界に轉ぜられる。「このいやらしい生身の外、俺の背後には何もない。」（別れ）といい、「忍辱の鎧を着て光り輝く街に入」（別れ）ろうとするのである。したがつて現實の世界は「凡てが幸福の宿命をもつ」（錯亂Ⅱ）ているのである。一切衆生悉有佛性である。衆生は衆生である。しかし即佛性でもある。現實の二元對立の世界は醜怪、束縛、停滯、愚劣の世界である。しかしかかる世界を媒介としてのみ絶對は現成する。かかる絶對の現成の媒介としてフロリダを描き出したのである。だから、これはフランスのみならず、當時のヨーロッパ的世界にとつては incroyable であつたわけである。

さて incroyables Florides であるが、フロリダについては「花について詩人に語りしこと――テオドル・ド・バンヴィルに捧ぐ」の三において

Tu ferais succéder, je crains,
Aux Grillons roux les Cantharides,
L'or des Rios au bleu des Rhins,——
Bref, aux Norwèges les Florides :

我は惧る、汝が褐色の蟋蟀の代りに
斑猫（ハンメウ）を持ち出さんことを、
リオの金色に非ずしてラインの碧色を、
さなり、ノルェーに代るにフロリダを。

とあることによつて明かになることと思う。リオ――熱帯地方の河（全集脚註參照）に對するにライン、フロリダに對するにノルェー。原始蠻地に對するものとして、ライン、ノルェーをあげている。ノルェーについては「渴の喜劇」二、精神、において

Juifs errants de Norwège,
Dites-moi la neige.
……
諸威をさすらふ猶太人
雪の話をきかせてくれ
……

とあるように（それもここでは「まつぴらだ、いづれ味のない飲みものさ。」と否定されている）「雪のノルェー、味のない飲みもの」としてとらえられている。それに對立する、フロリダである。かくてフロリダは、原始、蠻地、安らぎの泉としてここに出されているのである。それが incroyable であるとは、前述の意味においてである。即ちかかるフロリダが即ち絶對現成の國でもあるからであり、ヨーロッパ的世界から見れば正に incroyable であつたわけである。J'ai heurté とはかかる世にも不思議の國が突如ひらかれてきた感じを正に現わしている。

des yeux de panthères aux peaux d'Hommes——

花に入り亂れた「ヴァイアンの眼」をもたぬ眼を意味する。また同時に貪婪の眼、無求でない眼でもある。mêlant とはかかる眼も花を現成する媒介となることを意味する。

Des arcs-en-ciel tendus comme des brides / Sous l'horizon des mers, à de glauques troupeaux.

青緑色の羊群に虹がかかる。l'horizon des mers, à de glauques troupeaux いづれも、前の花に類するものである。海については今更いうまでもない。羊の群については「忍耐の祭」一、で

——Ah moins seul et moins nul! ——je meure.

Au lieu que les Bergers, c'est drôle,

Meurent à peu près par le monde.

——ちつとはましに賑やかに、死にたいものだ!

ところで羊飼さへが、大方は

浮世の苦勞で死ぬるとは、可笑しなこつた。

といつている。そこにこそ無畏無所住の世界があるものとしてランボオにはとらえられている。しかもその羊の群は青緑色の羊の群である。青や緑については既に述べた。虹が tendus comme brides とは、brides は無所住の世界を否定するものである、brides の存するところ、停滯、我執、したがつて、そこから一切の煩惱が生れ、絶對の安らぎは永遠に消え去つて行く、今虹がこの brides のように、水天の下、羊の群につながる。兩者がつながつている。無畏無所住の世界は觀念的に彼岸にある世界ではない。この生身の現實の中にこそあるという事を意味するのであろう。

(13) J'ai vu fermenter les marais,——

沼はいうまでもなく、流れることなき黑き水である。酩酊船(24)にも

Si je désire une eau d'Europe, c'est la flache / Noire et froide……

とある。又「非望」に

「鐚銭同然の分別が又戻つて來て、——何、ちよつとの間だ——俺の數々の煩惱は、俺達は西洋にゐるのだと早く悟らなかつた事に由來する、と俺は氣付く。西洋の沼々よ。」……Les marais occidentaux!

といつている。ここからほとんど誤りなく、沼についてランボオの意味したことを引き出すことができるであろう。

前の la flache については noire et froide といつている。黑については一例としてやはり「母音」を引用しておこう。

A noir,……

A,noir corset velu des mouches éclatantes

Qui bombillent autour des puanteurs cruelles,

といつている。惡臭、醜怪の感情をあてている。

froide は「夕の祈禱」において

Mille Rêves en moi font de douces brûlures;

といつている。この「甘い火傷」の反對である。

「非望」における marais についてはさらにその意味が展開される。「西洋の沼々」といつている。その西洋は「東洋の終焉」に始つたものであり、それがこの「俺」の「煩悶」の基であつたのである。それは近代、文化、知性の象徵である。それは二元對立の優たるものである。そこには la sagesse première et éternelle はない。かかる西洋を沼をもつ

て象徴している。「底もなく絆もない」海に對して、「流れない黒い水」なる沼である。停滯、我執の、煩惱の沼である。ランボオが嫌惡し、脱出せんとした西洋、ヨーロッパをもつてその典型とする世界である。沼をかく解することは酩酊船(24)においても矛盾をきたさない。世俗の世界は沼にも比すべき非無所住の、煩惱の滾る巨大な世界である。

その魚簗には怪獸レヴィヤタンが腐爛して惡臭を放つ。nasses où pourrit dans les joncs tout un Léviathan とは世俗界の惡臭を放つ醜怪なる面を象徴するものである。Léviathan はもちろん nasses に對應するものである。煩惱の絆をたつことが如何に難しく、「羊飼ですらが浮世の苦勞で死」(「忍耐の祭」) ぬことをおもえば、まことに沼であり、腐爛せる Léviathanをもつて象徴するに適わしきものであろう。

Des écroulements d'eaux au milieu des bonaces

bonaces はこの場合、ランボオ的世界、海の靜寂、空の面をいつている。主も客も一切を超越した彼方の靜寂、空の一面が象徴されている。(ランボオは卽の關係において再び現實肯定に歸つてくるのだが) したがつて、écroulements d'eaux は世俗界における動亂を意味する。「ミシェルとクリスチーヌ」において、

Zut alors, si le soleil quitte ces bords!
Fuis, clair déluge! Voici l'ombre des routes.
Dans les saules, dans la vieille cour d'honneur,
L'orage d'abord jette ses larges gouttes.

畜生! 太陽はこの國々を見棄てるのか!
逃げろ、大洪水! 道さへ暗くなつて來た。
柳の並木に、お館の中庭に、
雷雨は先づ大粒の雨を叩きつける。

といつている大洪水である。卽ちこの écroulements d'eaux は「道を暗く」し、太陽をして「この國を見棄て」しめるものである。au milieu des はこの兩者の卽の關係を示すものと解してよいであろう。卽ちこの大凪は卽 des écroulements d'eaux である。「大洪水後」において、ランボオが再び、否定を媒介とする現實の大肯定に歸つてくることが明かに示される。「池よ、湧き上れ——橋の上にも森の上にも泡立ち、逆卷け。——黒い敷布よ、大オルガンよ、——稲妻よ、——さあ盛り上つて、逆卷き流れろ、——水よ、悲しみよ、又『大洪水』を盛り上げてくれ。といふのも洪水が引いてしまつてからは、——ああ埋れた寶石、ひらいた花、——これはもう退屈といふものだ」(大洪水後)。あるいはまた「運動」における「落下する大河」にも現われる。

(14) Glaciers, soleils d'argent, flots nacreux, cieux de braises, 氷河、銀の太陽は白色、火の空は赤色、flots nacreux は白色に近い中間色と見てよい。この白色と赤色との對稱的手法もランボオにおいてよく使われる手法である。「野蠻人」において「炭火は氷河の旋風に吹かれて雨と降る、——優美なものよ——俺達の爲に永劫に炭化された大地の心が、金剛石の風雨を投げかける、その火だ——ああ、世界よ」Les brasiers, pleuvant aux rafales de givre, ——Douceurs! ——les feux à la pluie du vent de diamants jetée par le cœur terrestre éternellement carbonisé pour nous.——O monde! といつている。(そしてこれには先にも引用したように「人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隱

遁や古めかしい情火とは遙かに遠く離れて」という言葉が添つている。）白が陰であり赤が陽である。その陰は、古めかしい隱遁ではなく、陽がまた古めかしい情火ではない。したがつて、ランボオ的世界における陰と陽とから解釋されねばならない。ランボオ的世界における陰と陽とは、靜と動、空と色、否定と肯定である。そして「炭火が氷河の旋風にふかれて」「ダイヤモンドの雨をふらす」のである。卽ち靜卽動、空卽色、否定卽肯定であつて、ここにランボオ的世界、ダイヤモンド、一顆明珠が現われる。

「岬」において「花と氷河の水との罅れ目の谿」des crevasses de fleurs et d'eaux des glaciers といつているのも同じことをさすものと思われる。否定に媒介された現實の大肯定に立つ、その世界を兩面から見て、象徴したのが、この Glaciers, soleil d'argent, flots nacreux, cieux de braises. である。

Échouages hideux——

「坐礁せる醜き舟」はいうまでもなく「動かぬ丸木舟」「鎖をひきずつて、いつもつながれてゐる丸木舟」（記憶）であり、停滯、我執の煩惱界をさす。

golfes bruns——

ここでもランボオの色彩感情が問題となるが、褐色に對してはやや鮮明でないところがある。しかし實はこれも極く初期のものを除けば、後は一定してくるようである。極く初期の「水の中から出てくるヴィーナス」の中で「褐色髮の女の頭」に對して「のろくさと間拔けじみて」「低能ぶりをそのまま具へて」といつているように、ランボオ的世界とは縁遠いものを感ぜしめる。しかし「夕の祈禱」で「Je pisse vers les cieux bruns très haut et très loin. 褐色の空に向つて、高々と遙かに俺は放尿する」といい、あるいは「看護修道尼」の中で「ある未知の精靈を禮拜したともおぼしき若者」が l'œil est brillant, la peau brune,「眸は輝き、皮膚は褐色」と形容されている。そこで、今は製作年代が酩酊船に近い後の二例をもつてこの「褐色の入江」をランボオ的絶對の世界を象徴するものとつておきたい。したがつて Échouages hideux *au fond des* golfes bruns とはこの兩者の卽の關係を示すものといえよう。

Où les serpents géants dévorés des punaises
Choient, des arbres tordus, avec de noirs parfums!

この句は、「花について詩人に語りしこと」のさきに引用した句のすぐ後で「されど、御身よ、いまや藝術こそは眞實なれば——巨大なるユーカリ樹に、十二詩脚の蟒蛇を卷くことは許されじ！」といつているところや、「メトロポリタン」の中で「喪服を着たやうな暗い大洋がもたらし得る最も陰慘な黑い水蒸氣によつて形成された、彎曲し、後退し、また下降する大空に、醜怪な帶狀をなして重つた濃霧の幕を作つて、瀝青の沙漠から眞直ぐに算を亂して敗走する、冑、車輪、舟、馬の臀。——戰闘だ。」といつているところに符合する。眞實をおおいかくし、虐殺する、醜怪なる世俗界をさす。

(15) J'aurais voulu montrer aux enfants ces dorades……——

この一節はほとんど説明を要しない位である。「世にも不思議なるフロリダ」の新世界を發見して子供に見せばやと思うのである。ここに子供が引き出されるのはさきにも述べたように、ランボオが子供に關心を

もつていたこと、彼の世界が嬰孩行としての性格をもつことに基く。櫻鯛、黄金の魚はもちろん、かかる世界の象徴。歌唄う魚とは、この世界が「先驅するもの」としての詩の世界であることによる。

Des écumes de fleurs ont bercé mes dérades——

ここは(4)のLa tempête a béni mes éveils maritimes と對比せられるべき意味をもつ。La tempête に對して Des écumes de fleurs である。(4)においてはその覺醒時の否定行のすさまじさがあるのに對して、今や「世にも不思議なるフロリダ」の發見による「柳は綠、花は紅」といつた觀がある。「陶醉の午前」において「あらゆる粗暴の裡に始つたが、今、焔と氷との天使等によつて終るのだ」といつている。

Et d'ineffables vents m'ont ailé par instants.——

ここに「俺の生活は一體目方がかからない」（惡胤）や「心も輕く身もかるく」（忍耐の祭——黄金時代）といつたのと同じ世界が示されている。無所住、透脫の輕さである。

(16) Parfois, martyr lassé des pôles et des zones,——

今や「世にも不思議なるフロリダ」の無所住、透脫の安らぎに到達した。しかしこの世界は一度把捉すれば、失うことのない世界ではない。「enfin といふことの無い」（「忍耐の祭」三、永遠）世界である。そこに、いわば一生の修練が要求される。それは兩極と地帶の果てることのない旅ともいえよう。ランボオにおける兩極とは、一切の否定に始つて、さらにその否定による現實の大肯定に立ち歸るその兩極をさすのであろうか。地帶とはおそらくそこに展開せられるランボオ的世界を指すものと思われる。

このはてることのない修練の旅に倦ずることもあろう。そこに果しのない悩みがあり嚴しさがある。「新しい時といふものは、何はともあれ、嚴しいものだ」（別れ）。「靈の戰も人間の戰の樣にむごたらしい」（同上）。そこに人間のどうすることもできない弱さがある。

La mer dont le sanglot faisait mon roulis doux——

海の嗚咽とは海の大慈悲心である。ランボオは祈り、救濟、愛の世界に到達した。Ⅱで述べた樣に「お前は俺を殺すだらう。……これが俺達の樣な情深い心の定めなのだ！」（錯亂Ⅰ）という、趙州を想わせる境地に到達している。「聖淨な愛だけが知識の鍵を與へてくれる。自然はまさしく情愛に充ちた見世物だ。妄想よ、理想よ、過失よ、おさらばだ。」（惡胤）……Je vois que la nature n'est qu'un spectacle de bonté. Adieu chimères, idéals, erreurs! といつている。聲聞緣覺ならぬ菩薩は衆生に立ち還つて救濟を念ずる。「靈の戰」に倦じた殉教者の誤ちをもなお救濟せんとする。ここにおいてランボオの海は菩薩の海である。聲聞緣覺二乘の海ではない。救濟の嗚咽をもらす海である。

Montait vers moi ses fleurs d'ombre aux ventouses jaunes

「黄の吸角ある影の花」、それはさしのべられた救濟の手である。ここで黄色に對するランボオの色彩感情にふれておこう。「ミシェルとクリスチーヌ」において

——Et verrai-je le bois jaune et le val clair,

——やがて俺には見えるのか、黄色い森と明るい谷、

といつている。この黄色い森と明るい谷は明かに大自然の安らぎの國である。

また「記憶」において

Plus pure qu'un louis, jaune et chaude paupière
el souci d'eau——……

一ルイ金貨よりも淨らかに、黄色く燃えた流れの眼瞼、
水に咲く金盞花よ…

といつている。この「淨らかな黄色く燃えた流れの眼瞼である金盞花」は「清らかな流れ」「黄金の流れ」と等しく、清淨なる無所住の世界をさすものである。

かくて黄色に對しては「清淨なる大自然の安らぎ」を對應させることができるように思われる。

ses fleurs d'ombre aux ventouses——

吸角は大慈悲心、救濟、を意味する。ランボオにおける「女」――それは世俗界、下界の象徴であつた。――をも救濟せんとする、安らぎの國に吸收せんとする大慈悲心を意味する。かくて junes をもつて形容される。ses fleurs d'ombre とは何を意味するか。これに符合するランボオ自身の言葉が檢出できないのでやや困難であるが、「地獄の夜」において

「この身の弱さと、この世の辛さ。ああ神樣、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺にはどうにも扱へない。――俺は隱されてゐる。而も隱されてゐない。」Ma faiblesse, la cruauté du monde! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens trop mal!—Je suis caché et je ne le suis pas.

といつている、この言葉は示唆にとむ。弱い人間に對する神の救濟に對して「匿ひ給え」cachez-moi といつている。かくて fleurs d'ombre とは「匿ひの花」――「救濟の花」の意味でもあろうか。

かくて Montait vers moi ses fleurs d'ombre aux ventouses junes とは、「靈の戰」に倦じた弱い人間である私に、この海、菩薩の海は、一切衆生を救濟し、清淨なる大自然の安らぎの國に迎えようとする大慈悲心、救濟の手をさしのべる、の意味に解してよかろうか。

Et je restais, ainsi qu'une femme à genoux……——

右の解が許されるならば、この句はほとんど説明を要しない位に明になる。「靈の戰」に倦じた殉教者も今や救濟せられてひざまづくのである。à genoux とは救濟せられた殉教者の姿であろう。

(17) Presque île, ballotant sur mes bords les querelles……——

Presque île は前の Péninsules démarées と全然意味を異にする。これは「岬」や、「少年時」における「沖合へ遙かに延びた突堤」を想わせる。「岬」においては「金色の曙に、また、顫へるやうな夕暮に、俺達をのせた二本マストのささやかな帆船は、沖合からこの別墅と附屬地とをまともに眺める」といつている。即ち舟から岬の國を眺めているのである。その國はさきに引用したように「花と氷河の水との罅れ目の谿」なのである。否定と肯定とが轉換的に結びついた、大肯定の國である。さきに纜をといて Péninsule から出た單なる海ではない。今や海であつたとしても菩薩の海である。菩薩の海はこの Presque île を中にふくみ、突堤を中に含む海である。

「少年時」においても「本當に俺は沖合遙かに延びた突堤の上に棄てられた少年かもしれぬ。行く手は空にうち續く道を辿つて行く小僧かもしれぬ。」といつている。ここは空と海と突堤の合一である。この突堤はやはり「花と氷河の水の罅れ目の谿」である。この半島はかかる岬、突

堤である。これこそランボオが最後に到達した國である。
les querelles et les fientes d'oiseaux clabaudeurs aux yeux blonds.――…

金色の眼をした鳥はいうまでもなくかかる岬の國の鳥である。そしてこの「岬の國」は彼岸的な、單なる靜寂、空の國ではない。色の動的の國である。clabaudeurs という所以である。したがつて querelles は問題でない。fientes が問題である。この岬の國の鳥は、もはや霞を食つて生きているわけではない。糞もする。しかし單なる糞ではなく、「夕の祈禱」の

Tels que les excréments chauds d'un vieux colombier,
Mille Rêves en moi font de douces brûlures:

古ぼけた鳩小屋にたまつた熱い糞のやうに
俺の胸には簇がる夢が甘い火傷の痕をつくる。

や、「花について詩人に語りしこと」の

――En somme, une Fleur, Romarin
Ou Lys, vive ou morte, vaut-elle
Un excrément d'oiseau marin?
Vaut-elle un seul pleur de chandelle?

――果して、迷迭香(ロマラン)にあれ
百合花にせよ、生けるも枯れたるも
花は、海鳥の糞に値するや?
蠟涙の一滴に値するや?

といつている鳥の糞である。夢がつくる甘い火傷の痕を想わせる糞であり、花も及ばぬ糞である。卽ち岬の國の鳥の糞である。

「鹽の戰」に倦じて、救われ、女性のように、ひざまづいている殉教者の舷に、岬の國の鳥は喧噪とこの糞とをもつて輕くゆする。酩酊船を大肯定の國へひき入れようとするわけである。

Et je voguais, lorsqu' à travers mes liens frêles/Des noyés descendaient dormir, à reculons!……――

mes liens frêles――一見すると酩酊船に矛盾するように思える。酩酊船に細索にしろ、索がかかつているはずはないから。しかし今や酩酊船は岬を中にふくみ、突堤を中にふくむ菩薩の海に漂う舟である。岬の國の救の手がさしのべられているのである。liens frêles とはこの國の救の手をさすものであろう。

Des noyés…… à reculons――

水死人はすでにのべたように、消え去つて行くかつての「煩惱」をさす。その水死人は今は逆に、舟とは逆に流れてゆく。舟には岬の國の救の手がかかつている。この舟と逆に流れて行く水死人とは、なお大肯定に至らず、最初の否定行における煩惱をさすのであろう。そこになおこの殉教者の弱さがある。ランボオにとつてはこの「岬の國」に至らねばならぬのだが、なお否定行の一面がとかくうち勝とうとするその弱さを意味するのであろう。「惡胤」における、つぎの一節は正にこの間の境地を語つているのであろう。

「放蕩は正しく愚劣である。惡德は愚劣である。腐肉は遠くへうつちやるがいい。だが、時計が、この純潔な苦惱の時を告げて、止つて了ふわけはなからう。俺は小兒の樣にさらはれて、あらゆる不幸を忘れ、天國に戲れようとするのであるか。」

(18) Or moi, bateau perdu sous les cheveux des anses,——

(17)において「あらゆる不幸を忘れ、天國に戯れようとするのであるか。」という弱さへの反省があり、すでに「岬の國」の救の手はさしのべられている。

かくて酩酊船は「入江の髪の藻の下に難破」する。この bateau perdu とは何を意味するか。「惡胤」の一節が正しく語つてくれる。

「天使等の正しい歌聲が救助船から起る、聖淨な愛だ。——二つの愛だ、俺は地上の愛にも死ねる、獻身の想ひにも死ねる。俺は多くの人を棄てて來た、俺が行つたら、彼等の苦痛は増すばかりではないか。俺を君達難破人の仲間に入れるがよい。取殘された人々は俺の友ではないか。彼等を救ひ給へ。」……Vous me choisissez parmi les naufragés; ……

Bateau perdu とは、酩酊船が今や救濟、愛の世界に入つたことを示す。ここで酩酊船は、佛教の言葉を借りるならば、緣覺聲聞二乘の世界から菩薩に轉じたのである。この條は、「渦の喜劇」三、の中で

j'aime autant, mieux, même,
Pourrir dans l'étang,

池の藻屑と腐るも同じさ
どうして、よつぽどましかもしれぬ。

といつているところを想わせるものがある。

Jeté par l'ouragan dans l'éther sans oiseau,——

この颶風は「錯亂I」にある「お前は俺を殺しちまふだらうよ。」といつている「お前」、卽ち「女」、狂氣の處女である。趙州のように、自らは地獄に落ちることによつて救濟を念じるのである。l'éther sans oiseau ——ランボオにおいて、鳥は、普通にいわば「天國」の象徴、あるいはそれに附隨するものとして描かれている。

……熱帶風の食堂では
小兒らと、鳥籠の小鳥たちのおしやべり
〔ブラッセル市〕

また、

百羽の鴉の聲を伴奏にして
まことによい聲、天使のお聲
〔カシスの川〕

したがつて l'éther sans oiseau は「天國」ならぬ「下界」をさすものと思われる。

Moi dont les Monitors et les voiliers des Hanses / N'auraient pas repêché la carcasse ivre d'eau;——

酩酊船は、下界の否定、さらにその否定により、現實の大肯定に至り、さらにその立場を超えて救濟、愛の世界に至つて、今や菩薩として下界に至る。もちろん直接的な下界の肯定ではない。かかる bateau perdu としての私、その私のかつてのなきがら carcasse ivre d'eau を誰が拾おうか。海防艦もハンザの舟も。carcasse ivre d'eau はかつての透脫した酩酊船をさすのであろう。

(19) Libre, fumant, monté de brumes violettes——

世阿彌の言葉をかりるならば、「悟り悟りて未悟に同」じい、「下三位に遊通する」世界において「安き」境地がある。それは「智外の非」もなく、さらに「智外の非の用心」すらなき境地である。かつての透脫

した酩酊船のなきがらを捨てて、下界に遊通する酩酊船の境地こそ「安き」境地 libre である。

brumes violettes は、すでに何度も引用した、蜘蛛の食う「紫の菫草」、あるいは「野蒿苣に菫」に符合するものである。

Moi qui trouais le ciel rougeoyant comme un mur

空をくりぬいた舟とは融通無碍の意味であろうう libre に對應する詩句と見てよい。

Qui porte,…… Des lichens de soleil et des morves d'azur;——

今や酩酊船は下界に遊通する舟である。したがつてその積むものは、太陽の蘚苔、蒼空の鼻汁である。太陽蒼空と、蘚苔鼻汁はおよそ對蹠的である。「悟り悟りて未悟に同じ」といわれる未悟は、悟りの現成としての未悟である。下界に遊通する酩酊船は絶對の現成する舟でもある。かくして太陽の蘚苔、蒼空の鼻汁とは正に下界に遊通する酩酊船の象徴である。

confiture exquise aux bons poètes,——

ランボオにおいては、詩は「行動の韻律化」ではなく「先驅するもの」であつた。根源的絶對の世界にこそ詩があつた。しかしこの根源的絶對の世界は色の世界を媒介としてのみ現成する。根源的絶對の世界の現成する世界である。この太陽の蘚苔、蒼空の鼻汁こそ詩人にとつては至上の美味の砂糖菓子である。

(20) Qui courais, taché de lunules électriques,——

この詩句は(6)の le Poème de la Mer infusée d'astres, et lactescent, に對應する。即ち透脱した酩酊船の一面を示す。

Planche folle, escorté des hippocampes noirs,——

hippocampes noirs は黒色が示す通り、また hippocampe が cheval marin ともいわれるように、いづれも下界の醜怪の一面を示す言葉である。それに護衛された、planche folle とは、——planche はもちろんこの酩酊船をさす、問題は folle にある。「錯亂 I」に vierge folle とあるように、これはやはり下界に遊通した酩酊船の姿をさすものでなければならない。また「生活」において

「新たな懊惱に獻げたこの身であつてみれば——ただ奸佞な狂人となるのを待つばかりだ。」je suis dévoué à un trouble nouveau, ——j'attends de devenir un très méchant fou, といつている言葉は示唆にとむ。下界に遊通した酩酊船は、救濟、愛の世界にある。それは新たな懊惱に身を獻げた舟である。それは一面狂人的であるからである。「錯亂 I」においても「生活」においても下界を fou をもつて表現している。かくて下界に遊通する酩酊船は「悟り悟りて未悟に同じ」といわれる意味での未悟 fou である。即ち planche folle である。

以上二詩句で、かかる下界に遊通する酩酊船をさす。

Quand les juillets faisaient crouler à coups de triques 'Les cieux ultramarins aux ardents entonnoirs;——

かくして、「碧瑠璃の空」は「棍棒の亂打に」崩壊し終るのである。この崩壊した碧瑠璃の空は、いうまでもなく下界に遊通するまでの、透脱の酩酊船の世界をさす。Les juillets とはかかる世界の轉換革命を象徴する。救濟、愛の世界への轉換、未悟の世界への遊通の革命である。

(21) Moi qui tremblais, sentant geindre à cinquante lieues 'Le rut de

Béhémots et des Maelstroms épais,——

Béhémots (esprit du mal) と Maelstroms épais は下界の悪とその巨大な渦巻である。

Le monde est vicieux

現し世なべて悪の世ぞ

(Age d'Or)

といつているこの現世の姿である。その呻きはそこからもれる煩悩懊悩の聲である。それを五十里の彼方にきいて戰き顫えたというのは世俗、知性、倫理、キリスト教、一切を否定しようとしたかつてのランボオの姿をさすものであろう。

Fileur éternel des immobilités bleues,——

この一切の否定行の結果現われたのが immobilités bleues の永遠の紡ぎ手としてのランボオである。 immobilités bleues は清淨無垢の靜寂、空の世界をさす。

Je regrette l'Europe aux anciens parapets!——

この靜寂、空の世界から、さらに現實の大肯定に至り、さらに救濟、愛の世界に入つたランボオは、この昔ながらの胸壁に圍まれたヨーロッパをなつかしむのである。昔ながらに「胸壁に圍まれたヨーロッパ」とはそこに解放、安らぎのない、束縛の世俗界である。西洋、ヨーロッパ、文化、近代を嫌悪憎悪したランボオではあるが、Les juillets によつて碧瑠璃の空は崩壊し、救濟、愛の世界への轉換をみたランボオは、「天國に戯れようとする」心を捨てて「彼等を救ひ給へ」と念じて(悪亂)ここに Je regrette というわけである。

(22) J'ai vu des archipels sidéraux! et des îles——

archipels sidéraux は天上界をさす。「わが放浪」に、

……Mon auberge était à la Grande-Ourse

——Mes étoiles au ciel avaient un doux frou-frou

わが宿は大熊星座——大熊星座の星々は、

やさしくささやきささやいてゐた。

とある。この îles は地上の島々をさす。

Dont les cieux délirants sont ouverts au vogueur:——

地上の島々の空は immobilités bleues ならぬ錯亂せる空である。救濟、愛の世界に入つて、下界に遊通する酩酊船には、この錯亂せる天空も開かれたのである。今や逃れるべき空ではないのである。

——Est-ce en ces nuits sans fond que tu dors et t'exiles,——

この夜は(10)の「綠の夜」ではない。地上の島々をおおう錯亂せる「黒色の夜」である。

sans fond はこの場合、「記憶」における à quelle boue? を想わせる。深さに對する恐怖の情をあらわしている。

Million d'oiseaux d'or, ô future Vigueur?——

この百萬の金色の鳥は、もはや單なる天國の鳥ではない。さきの岬の國の oiseaux clabaudeurs aux yeux blonds を想わせる。天上、地界に遊通する鳥であろう。救濟、愛の鳥である。だからこそ「未來を創る生氣よ」と重ねていうわけである。底無しの、黒色の、恐怖の夜に、この救濟、愛の金の鳥よ、望みをもたらすこの金の鳥よ、汝はここに眠り、流浪するというのか? そこにはかく展開せられた世界に對する詠嘆の

情がこめられている。

㉓ Mais, vrai, j'ai trop pleuré!——

この一句は「少年時」における「熱い涙の永遠により創り出された沖合に、雲がむらがり重つてゐた」の一節を想起させる。一切の否定によつて、彼方沖合に見出された永遠。酩酊船も纜をといて非情の大河を下つて行つたのはかかる沖合なる永遠をめざしたのである。そこには熱い涙が流されたのである。今は酩酊船はそれにすら悔恨の情を感じているのである。

Les Aubes sont navrantes. / Toute lune est atroce et tout soleil amer:—

曙は⑻における「一群の鳩をさながら歡喜に滿てる曙」であろう。月は酩酊船の中には出てこないが⑽における「燦々と眩き雪の綠の夜」を想わせる。日は同じく⑺における「金紅燦たる日」であろう。いづれも「世にも不思議なるフロリダ」につきあたるまでの曙、月、日である。否定の彼方に見出され、創り出された、さらにもう一度の否定による大肯定に至るまでの、もちろん救濟、愛に至るまでの世界である。今、救濟、愛の世界が展開せられて、下界に遊通せんとする酩酊船にとつては、これらはすべて「胸をえぐりて痛く」、「無慙に」、「苦き」ものである。

L'âcre amour m'a gonflé de torpeurs enivrantes.——

「醉ひしれし痲痺」とは⒅の「水に浸りて醉ひしれしこの形骸」の痲痺をさす。その酩酊船は、bateau perdu となるのだが、そのかつてのなきがらであり、海防艦も、ハンザの舟も拾おうともしないなきからである。そして水に浸つて醉いしれているのである。それも、もちろん、大肯定、救濟、愛に至るまでの世界である。酩酊船が纜をといて彼方の沖合に求めた世界である。その求める心が、ここでいう「戀」であり、今の酩酊船から見れば「苛酷の戀」であつたのである。

O que ma quille éclate! O que j'aille à la mer!

救濟、愛の世界に入つた酩酊船は、かつては纜を解いて彼方沖合に世界を求めたのだが、今や下界に遊通せんとする舟である。かくて「龍骨よ破裂せよ、おお海底にわれを沈めよ」というわけである。

ここで「別れ」の一節を引用しておこう。

「……俺はありとある祭を、勝利を、劇を創つた。新しい花を、新しい星を、新しい肉を新しい言葉を發明しようとも努めた。この世を絶した力も得たと信じた。さて、今、俺の數々の想像と追憶とを葬らればならない。……今、務めを捜さうと、この粗々しい現實を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。……最後に、俺は自らの虚僞を食ひものにしてゐた事を謝罪しよう。さて行くのだ。……このいやらしい生身の外、俺の背後には何物もない。……曉が來たら俺達は、燃え上る忍辱の鎧を着て、光り輝く街々に這入らう。……」

㉔ Si je désire une eau d'Europe, c'est la flache/Noire et froide...——

かく酩酊船は彼方沖合に世界を求めることなく、下界に遊通せんとする。その事は一度は嫌惡憎惡したヨーロッパの水に歸らんとすることとなる。Si je désire une eau d'Europe とは、その意味であり、さきの Je regrette l'Europe aux anciens parapets に對應する。そのヨーロパは依然として「冷かなる黝き隱沼」、即ち⒀においてすでに述べたように停滯、我執の煩惱の沼であることに變りはない。

しかし、それはどこまでも、ヨーロッパの直接的肯定ではない。否定を媒介とした大肯定であり、「菩薩」を行じようとするのである。かくてその沼は

où vers le crépuscule embaumé / Un enfant accroupi plein de tristesse, lâche / Un bateau frêle comme un papillon de mai.

となる。單なる「冷かなる黝き沼」ではなく、風薫る沼である。そこには大慈悲心の菩薩にも似た、子供が悲しみにみちてうづくまつている。そして「五月の蝶さながらの木葉の小舟」を放つ。「目方がかからない」、「五月の蝶」にも似た、無畏無所住の爽かな舟を放つのである。その舟は「心も輕く、身も輕く」流れただようことであろう。卽ちこの「西洋の沼」に絶對、無畏、無求、無所住の世界が現成する。僭越ではあるが、飜譯の「今なお」は削除したいと思う。「水を望むとせば」は「水を望むとも」と譯してみたい。

(25) Je ne puis plus, baigné de vos langueurs, ô lames,——

baigné de vos langueurs, ô lames とは、今や「光り輝く街」である「西洋の沼」に入つた事を意味する。この倦怠は沼の倦怠である。そこに「菩薩」を行じようとするのである。下界に遊通して、救濟し、愛の中につつもうとするものにとつては、

「棉花積む船の曳く水尾を追ふ流離も、
旌旗と焔の驕慢の眞中を貫く彷徨も、
はた船橋の恐しき眼を搔潜る漂流も、
終ひに叶はずなり果てたり矣。」

である。

porteur de cotons はもちろん、(2) の porteur de blés flammands ou de cotons anglais をさす。その舟は世俗を否定して、彼方沖合に世界を求めて漂よう舟であつた。今やこの漂流はもはやできないのである。この「棉花積む流離」はいわば「聲聞緣覺二乘」の世界であるから。

l'orgueil des drapeaux et des flammes,——

これは「俺の心よ、血と煥の」における

Notre marche vengeresse a tout occupé
恨みにもえた進軍は一切合切占領だ、

といい、また「野蠻人」における

「日々の諸季節と、また人間どもと國々とを遙か彼方の後にして、血を滴らす生肉の旗 Le pavillon en viande saignante は、海の絹と北極の花々の上に。」

といつている言葉に符合するものであろう。卽ち「旌旗と焔の驕慢の眞中を貫く彷徨」とは、一切合切の否定行を意味する 。「聲聞緣覺二乘」ならぬ「菩薩」にはそれも、もはやできないのである。

les yeux horribles des pontons——

この pontons は恐らく船橋ではなくして、英佛の戰の時、特に第一帝政時代に、囚われ人をポーツマスその他に投錨した古舟に抑留した、營倉としての古船をさすのであろう。この古船への抑留は想像を超えた恐怖をもたらしたのである。

したがつてこの「ポントンの恐しい眼」とは抑留、束縛を意味する。それをかいくぐる漂流とは、いうまでもなく、下界を逸脱しようとする漂流である。したがつて、前と同様、「菩薩」の立場ではもはやそれもできないわけである。下界にあつて、救濟し、愛の中につつもうとするのである。下界の中にこそ絶對を現成しようとするのである。

* * *

以上によつて「酩酊船以後」における思想的展開は、すでに酩酊船において十分に準備されていたのであることが明瞭となつた。酩酊船はランボオにおいて劃期的の作品であつた。

最後に一言斷つておきたい。私は詩を思想的にのみ扱つて終れりとする立場をとろうとするものではない。詩的言語の意味とその構造については別に論じてみたいと思つている。

—二八・一〇・一五—